

大館市文化財調査報告書 第20集

金坂遺跡
大館市内遺跡詳細分布調査報告書(7)

2023

秋田県大館市教育委員会

大館市文化財調査報告書 第20集

金坂遺跡
大館市内遺跡詳細分布調査報告書(7)

2023

秋田県大館市教育委員会

例 言

1. 本書は、令和4年2月から12月までに実施した個人住宅建築に伴う金坂遺跡（秋田県教育委員会 登載番号204-4-47）発掘調査と市内遺跡の試掘・確認調査の報告書である。なお、令和5年1月以降に実施した調査は、次回に報告する。
2. 調査は、国及び秋田県の補助を受け、下記の体制・期間で実施した。調査を実施した地区の遺跡名、所在地、調査面積、調査期間等は表1に示すとおりである。

（1）調査体制

教 育 長 高橋 善之

教 育 次 長 石田 一雄（令和4年3月31日まで）

教 育 次 長 成田 浩司（令和4年4月1日から）

歴史文化課長 小松 工

歴史文化課長補佐

兼埋蔵文化財係長 加賀 至（埋蔵文化財係長兼任は令和4年3月31日まで）

埋蔵文化財係 滝内 亨（調査担当。令和4年4月1日から埋蔵文化財係長）

嶋影 壮憲（調査担当）

馬庭 和也（調査担当）

調 査 補 助 員 高橋 光大

（2）調査期間

現地調査 自：令和4年2月24日 至：令和4年3月11日

自：令和4年4月19日 至：令和4年12月21日

（3）調査面積

令和3年度大館城跡 120㎡

令和4年度市内遺跡 247.5㎡

金坂遺跡 62㎡

3. 本書の作成にあたり、遺構図のトレースは高橋、滝内、馬庭、遺物実測は山田勇治、遺物のトレースは石垣美樹が担当した。室内での遺物写真撮影は(株)ワールドプラン社に委託した。
4. 本書は、II-3～5は滝内、II-1は馬庭、その他は嶋影が執筆・編集した。
5. 本書に使用した地形図は、国土地理院発行の1/25,000地形図、並びに秋田県教育委員会発行の秋田県遺跡地図（北秋田地区版）、大館市発行の「都市計画図 1/2,500」である。
6. 本調査で出土した遺物並びに記録類は、大館市教育委員会が保管する。
7. 金坂遺跡出土陶磁器については弘前大学人文社会科学部関根達人教授、大館城跡出土陶磁器については佐賀県立九州陶磁文化館 大橋康二名誉顧問にご教示いただいた。
8. 調査の実施にあたり、下記の諸機関・諸氏にご教示・ご協力を賜った。記して感謝いたします。
秋田県北秋田地域振興局農林部農村整備課、秋田県教育庁生涯学習課文化財保護室、
秋田県埋蔵文化財センター、大館市総務部総務課、大館市消防本部消防総務課、
株式会社一条工務店、株式会社N-スタイル、渋谷一級建築士事務所、有限会社吉田興業、
宇田川浩一、大橋康二、清野宏隆、関根達人、鷹嘴勇二、高橋昭悦、立石繁義、安田 創、
吉田秀明（五十音順、敬省略）

凡 例

1. 本書遺構図等における各基準は、下記のとおりである。

略記号・縮尺

遺構配置図	1 : 200
土坑 (S K)	1 : 40
落とし穴 (S K)	1 : 40
溝・堀跡 (S D)	1 : 40・1 : 60
池跡 (S G)	1 : 40
焼土・カマド状遺構 (S L)	
柱穴・柱穴様ピット (S P)	1 : 40・1 : 60

図の方位

発掘区のX軸正方向が図面天方向に合致する。例外はその都度方位を示す。

遺構図等の標高

遺構配置図・遺構図の標高値は海拔高度による。単位はメートル。

スクリーントーン

遺構平面図の柱痕跡 網目

遺物の実測図及び写真図版の縮尺

土器・陶磁器・礫石器・石製品	1 : 3
陶器甕	1 : 4
小型磁器・剥片石器・鉄製品	1 : 2
銭貨拓図	1 : 1

土層の色調

『新版標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局2006年版）を使用し、カラーチャートの番号を記した。

2. 一覧表における遺構の規模のうち、確認面・底面の項は、長径×短径で表した。
3. 銭の計測方法は「金属製品の観察と実測」『発掘調査の手引き』（文化庁文化財部記念物課2010）に従った。
4. 今回の調査における作業と遺物の分類基準は、大館市文化財調査報告書第11及び第15集に準拠する。なお、新たに自然遺物をNとして設定した。近世の陶磁器・土器等の器形分類や個体の定義名称は『内藤町遺跡』（新宿区内藤町遺跡調査会編1992）に、陶磁器の集計方法は『松前町 福山城下町遺跡』（財団法人北海道埋蔵文化財センター編2012）に、肥前・肥前系の時期区分は『肥前陶磁』（大橋1989）、『九州陶磁の編年』（九州近世陶磁学会2000）に従った。

本書に掲載した遺物の分類基準の概要は、以下のとおりである。

土器・陶磁器 (P)

- 3群 筒形土器群
- 4群 縄文中期後半の土器群
- 5群 縄文後期～晩期の土器群
- 7群 古代の土器
- 2類 土師器

8群 中世以降の陶磁器・土器

中世以降の陶磁器・土器

1類 磁器

2類 陶器

3類 土器

石器・石製品（S）

1群 石器

定形化した石器、使用を目的とした二次加工や使用痕のある剥片・礫など。なお、1群の石器は次のとおりに細分される。

4類 U. フレイク

部分的な刃部をもつ剥片類

6類 擦石・敲石類

7類 砥石・石皿・台石類

9類 その他の石器

2群 剥片

二次加工や肉眼での使用痕の認められないもの

3群 石核

4群 礫

金属製品（I）

自然遺物（N）

4. 陶磁器類の推定個体数は、残存した底部破片から算定した「底部換算値」と個体別資料の和である。「底部換算値」は、『内藤町遺跡』（新宿区内藤町遺跡調査会編1992）第II分冊第2章第2節に基づいて、次の式で算定した。

底部換算値

$$= 1/16 \times a + 3/16 \times b + 5/16 \times c + 7/16 \times d + 1 \times e$$

目 次

例言	i
凡例	ii
目次	iv
I 金坂遺跡	1
1 遺跡	1
(1) 調査の経緯	1
(2) 調査の経過	1
(3) 遺跡の位置と周辺環境	2
(4) 発掘調査の方法	5
(5) 層序	5
2 遺構と遺物	6
(1) 縄文時代	6
(2) 江戸時代以降	6
3 発掘区の遺物	16
(1) 陶磁器・土器	16
(2) 金属製品	16
(3) 石製品	16
4 工事立会	20
(1) 工事立会A地区	20
(2) 工事立会B地区	20
5 要約	23
(1) 遺構	23
(2) 遺物	23
II 試掘・確認調査	33
1 大館城跡	33
2 真館II遺跡隣接地	43
3 本宮上ノ山遺跡隣接地	45
4 芋ヶ岱遺跡及び芋ヶ岱II遺跡	47
5 萩峠遺跡隣接地	56
6 中仕田II遺跡	62
報告書抄録	65

表1 令和4年 発掘調査実績

令和4年度（本発掘調査）

事業	登載番号	遺跡（地区名）	調査地	調査対象面積(m ²)	調査面積(m ²)	調査期間
個人住宅新築	204-4-47	金坂遺跡	字八幡10	82	62	8/18～9/10

試掘・確認調査

事業	登載番号	遺跡（地区名）	調査地	調査対象面積(m ²)	調査面積(m ²)	調査期間
令和3年度						
大館市本庁舎建設	204-4-46	大館城跡	字中城20	7300	120	2/24～3/11
令和4年度						
個人住宅新築工事	204-12-52	真館Ⅱ遺跡隣接地	比内町新館字真館122-1	120	5.5	4/19～4/20
消防車庫新築工事	204-4-99	本宮上ノ山遺跡隣接地	本宮字寺ノ沢31-1	187	8	9/14～9/16
ほ場整備事業	204-4-58	芋ヶ岱遺跡及び芋ヶ岱Ⅱ遺跡	雪沢字蕨ヶ岱地内	82000	88	10/20～11/12
ほ場整備事業	204-4-81	萩峠遺跡隣接地	軽井沢字小清水ほか	191000	140	11/15～12/6
個人住宅新築工事	204-15-38	中仕田Ⅱ遺跡	早口字中仕田50	71	6	12/20～12/21
計					247.5	



图1 遺跡位置図（大館・比内地区 1:50,000）



图2 遺跡位置図（大館地区東部 1:50,000）



图3 遺跡位置図（田代地区 1:50,000）

I 金坂遺跡

1 遺跡

(1) 調査の経緯

令和3年5月、大館市字八幡10番地の土地購入予定者（以下、事業者という）より個人住宅及び個人事業者による住宅の建築を行いたい旨協議があった。大館市教育委員会（以下、「市教委」という）は、当該地が周知の埋蔵文化財包蔵地内であり、土木工事等の際には事前に試掘調査が必要であると判断し、地権者に調査の協力を要請した。地権者から試掘調査の依頼文書が提出され、同年6月に市教委は試掘調査を実施した。調査の結果、平安時代～江戸時代の遺構・遺物が確認され、秋田県教育委員会（以下、「県教委」という）及び地権者に報告した。調査結果については、『大館市内遺跡詳細分布調査報告書(6)』（2022.3）に報告したとおりである。この結果、土木工事等の際には事前に発掘調査が必要であると判断し、事業者に文化財保護法第93条の規定に基づき、周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等の届出書を提出するよう求めた。事業者からは令和4年7月16日付で同届出書が提出され、8月2日付けで県教委宛進達した結果、8月12日付で住宅用道路については工事前に発掘調査が必要である旨回答があった。市教委は令和4年度の国・県費の補助事業として、記録保存のための発掘調査を実施することとなった。なお、宅地部分の切土・盛土工事、道路工事で遺構面に達しない箇所、及び道路側溝、水道工事箇所計1,317㎡について工事立会を実施することとなった。工事立会は、令和4年8月19日、9月10日・17～27日、10月26～31日（実質10日間）に実施した。

(2) 調査の経過

1) 発掘経過

- 8月18日 発掘調査開始、表土掘削開始
- 8月19日 表土掘削終了
- 8月20日 掘削範囲測量、グリッド杭打設
- 8月23日 器材運搬、調査区壁面精査
- 8月24日 遺構検出作業開始、遺物包含層掘削、遺構検出状況写真撮影、遺構掘削開始
- 8月26日 トータルステーションによる遺構平面計測
- 9月3日 全体清掃、全体写真撮影
- 9月6日 トータルステーションによる遺構平面計測、伐採木の切株周辺掘削
- 9月10日 発掘調査終了

2) 工事立会

8月19日、9月10日、21・22日の4日間で、敷地南西部（字八幡8）の切土工事及び宅地内（字八幡10）の道路造成工事の立会を実施した。立会面積は362㎡である。工事では重機で掘削していたが、遺構が確認された場合は必要な記録を作成した。

9月17日、21・22日、27日の4日間で、宅地造成部分の表土すき取りの立会を実施した。立会面積は920㎡である。基盤のローム層まで達しないようにすき取りを行ったため、遺構は確認されなかった。

1 遺跡

また、10月26～28日、31日の4日間で、本調査を実施した道路の東側で上下水道の水道工事の立会を実施した。立会面積は35㎡である。

3) 整理経過

令和4年12月22日から整理作業開始、遺物洗浄・注記、破片接合。

令和5年1月4日から遺物実測開始。1月11日から遺構図修正。1月14日から報告書執筆開始。

(3) 遺跡の位置と周辺環境

1) 地理的環境

金坂遺跡は大館市街地の中心部に所在する平安時代～中世の遺跡である。大館市街地の広がる大館段丘の北側には、長木川が西流し、この河岸段丘上にいくつかの遺跡が分布している。金坂遺跡もまた長木川の左岸に所在する。この川は雪沢地区付近を上流とし、東から西に県道2号線と平行して流れ米代川に合流する。遺跡周辺では長木川の支流として小十郎川が流れていたが、現在は埋められていない。遺跡は長木川の下流の左岸に4,200㎡の広がりをもつことが、今回の発掘調査に先立って実施した試掘調査によって明らかになっている(図4)。遺跡は東側から西側にかけて緩やかに下り、標高は約75m～74mである。

2) 歴史的環境

遺跡周辺の先史～古代の歴史的環境については、『土飛山館跡―片山自歩道事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書』(秋田県埋蔵文化財センター編2007)や『扇田道下遺跡発掘調査報告書』(大館郷土博物館編2013)に詳述されているため、そちらを参照されたい。ここでは江戸時代の八幡町について簡単に述べてみたい。

調査地点の行政地名「大館市字八幡」は江戸時代の八幡町から続く地名で、佐竹西家の鎮守八幡神社があるのでこの名がついた。八幡神社は初代大館城代小場義成が城内に建てたが、貞享4年(1687)4代佐竹義武が現在地に遷座建立した(『大館市の文化財』大館市教育委員会2003)。元禄以降の大館城下絵図には「八幡町」と記載されている。なお、八幡町には本藩から派遣された給人の近藤氏が多く居住したので「近藤町」とも称した。享保13年(1728)「大館絵図」(図5)では11軒中7軒が近藤氏である。近藤氏は常州赤館から佐竹氏の秋田転封に伴って大館へ来た一族である(『佐竹家臣系譜』常陸太田市史編さん委員会編1982)。「大館絵図」と対比すると、本調査地点は八幡町の北側の金坂から3区画目「近藤内蔵之助」付近にあたる。文化12年(1815)「大館城並びに城下居住絵図」にも近藤内蔵助、明治6年(1873)「秋田県第二大区第一小区大館町番号列戸絵図」には近藤六郎兵衛の名が記されていることから、江戸時代を通じて近藤氏の屋敷地であったと考えられる。本調査区から確認された1本の地割溝は「近藤内蔵助」の屋敷の南の屋敷境に一致する。調査区はこの屋敷の入口部分にあたる。

本遺跡の西側には通称「金坂」の坂があり、その南側は「金坂町」となっている。金坂は戦国時代からある地名で、秋田家文書に代官所支配の村として「比内庄金坂村」と記載されており、地名の由来は金吹き場所があったことによるという(『角川日本地名大辞典5 秋田県』1980、角川書店)。この金坂村が江戸時代に金坂町となったようであるが、戦国時代の金坂村に関する絵図等はなく、その範囲などは詳らかでない。本遺跡はこの金坂に面していることから遺跡名は金坂遺跡となっている。坂の名称は各絵図にはないが「大館絵図」など各時代の絵図に「金坂町」と記されている。



図4 発掘区および工事立会区域と周辺の地形（1：2,500）



図5 『大館絵図』

(秋田県公文書館所蔵 一部抜粋)

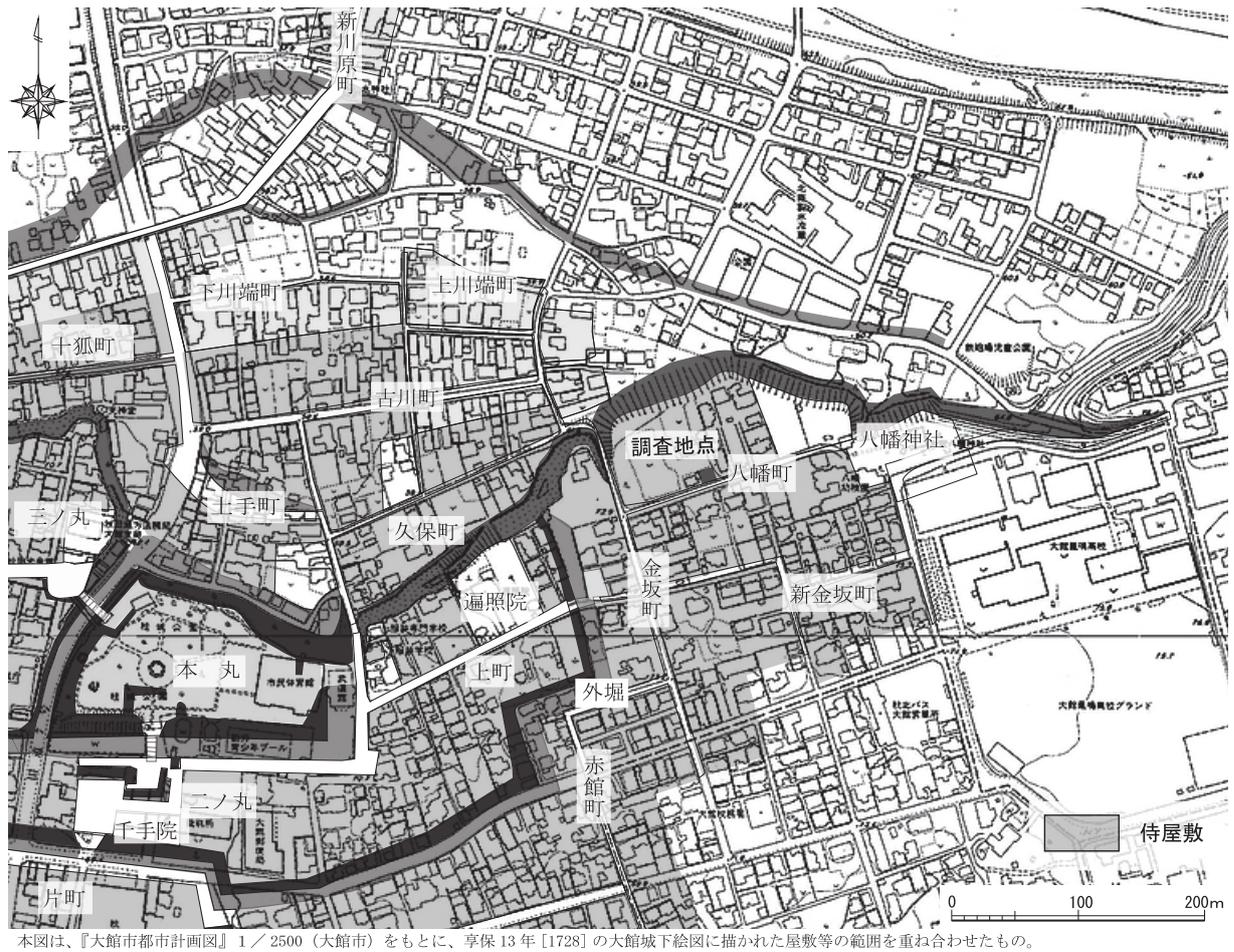


図6 享保期の当該地周辺

(4) 発掘調査の方法

本遺跡では、次年度以降も宅地造成に伴う発掘調査が継続して実施される可能性があるため、遺跡全体に統一した発掘区を設定することにした。街区基準点を基準とし、遺跡全域に基準（A-0）から東西方向をY軸、南北方向をX軸とする座標系によって10m方眼のメッシュをかけた。発掘区の名前は南東側の座標点（Y・X）で表示される。また、調査記録上この発掘区を4等分した小発掘区を設定し、座標杭より反時計回りにa～dとした。発掘区における公共座標は、C-3区でX = 30,430.000、Y = -22,410.000である（世界測地系）。

(5) 層序

本遺跡の層序は基盤層（申ヶ野軽石質火山灰層）に腐植土層が堆積するだけの単純なものである。層序は以下のとおり。

- I層 表土・耕作土。平均層厚50cm。
- II層 黒色～暗褐色土。遺物包含層で平均層厚は25cm。
- III層 黒褐色～にぶい黄褐色土。漸移層で平均層厚9cm。
- IV層 黄褐色ローム層。申ヶ野軽石質火山灰の風化層と考えられる基盤層。

2 遺構と遺物

調査区内からは、落とし穴2基、柱列1条、溝4条、池跡1基、柱穴・柱穴様ピット19基の遺構が検出され、遺構内より陶磁器など66点の遺物が出土した。

表2 時代別種別遺構一覧

時代	柱列	落とし穴	溝	池跡	柱穴・柱穴様ピット	計
縄文		2				2
江戸時代以降	1		4	1	19	25
計	1	2	4	1	19	27

(1) 縄文時代

1) 落とし穴

B-2区で2基の落とし穴が発見された。

落とし穴7 (図8)

位置 B-2区に位置し、北側で溝10と重複している。新旧関係は溝10が新しいと思われる。

遺構 平面形は溝状で、規模は確認面で長径2.23m、短径0.7m、確認面からの深さ1mである。埋土は黒色土と暗褐色土の互層である。遺物は出土していない。

落とし穴8 (図8)

位置 落とし穴7と長軸方向が平行して組になる落とし穴で、B・C-2区に位置する。北側で池跡9と重複している。新旧関係は池跡9が新しい。

遺構 平面形は溝状の形態で、規模は確認面で長径2.24m、短径0.6m、確認面からの深さ0.94mである。長軸方向は北から43°東へずれる。遺物は出土していない。

(2) 江戸時代以降

1) 柱列

柱列37 (図9)

位置 B・C-2区に位置する。屋敷地全体では、ほぼ南端にあたる。本柱列の西側に柱穴2基(S P20・30)が平行して近接する。S P16が溝10と重複する。新旧関係は明確ではないが、溝10の方が新しいと思われる。

遺構 規模は東西5mで、4基の柱穴で構成されるが、調査区外にさらに延びる可能性がある。主軸方向はN-65°-E。柱間寸法は東から1.8・1.5・1.8mを測る。埋土はいずれも黒色土である。遺物はS P19から混入した磁器の小破片が1点出土した。図9-1は染付磁器の鉢。

時期等 S P19から肥前磁器の小破片が出土していることから、本遺構の構築時期は19世紀以降と思われる。地割りの柵跡と推定される。

2) 溝 (図9)

調査区内からは、前述のとおり江戸時代以降に位置づけられる溝4条を検出した。これらの溝には溝10~13と名称を付した。本項ではこれらの溝について、項目ごとに総括的に記述する。なお、各溝の規模等については表6に示した。

分布 図9に示すとおり、B-2・C-2区に途切れながらL字に延びる溝である。溝10はS P 16と重複し、新旧関係は溝10が新しいと思われる。溝13とS P 20は重複するが、新旧関係は不明である。

遺構 規模は幅29~45cm、確認面IV層からの深さは溝10・13が5cm前後、溝11・12が25cm前後を測る。断面形態は底が平坦で壁がほぼ垂直に近い立ち上りのものが多い。その掘り方や埋土からは掘り返しなどの形跡は確認できなかった。

埋土 黒色土が堆積し、わずかのローム粒混じりの土が見られるものが多い。ロームブロックが多量に含まれる例はない。溝10の検出面から一部、炭化物が検出されている。

時期等 遺物は出土していないが、江戸時代以降の地割溝と推定される。柱列37と軸がずれて分布している。新旧関係ははっきりとしないが、溝が新しいと思われる。

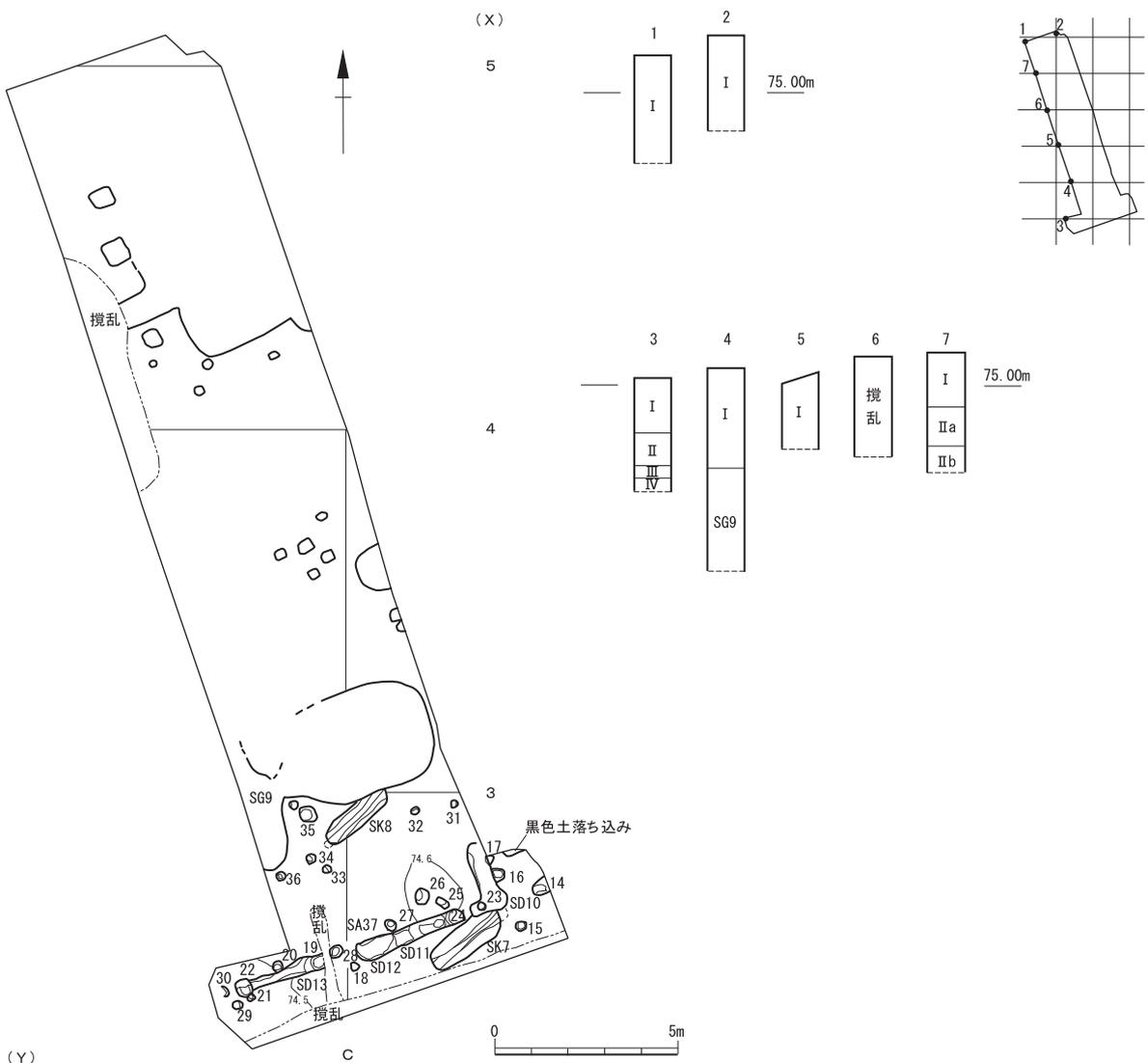


図7 遺構配置図と土層柱状図

2 遺構と遺物



調査終了全景



調査風景



池跡9

図版1 調査状況

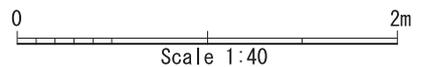
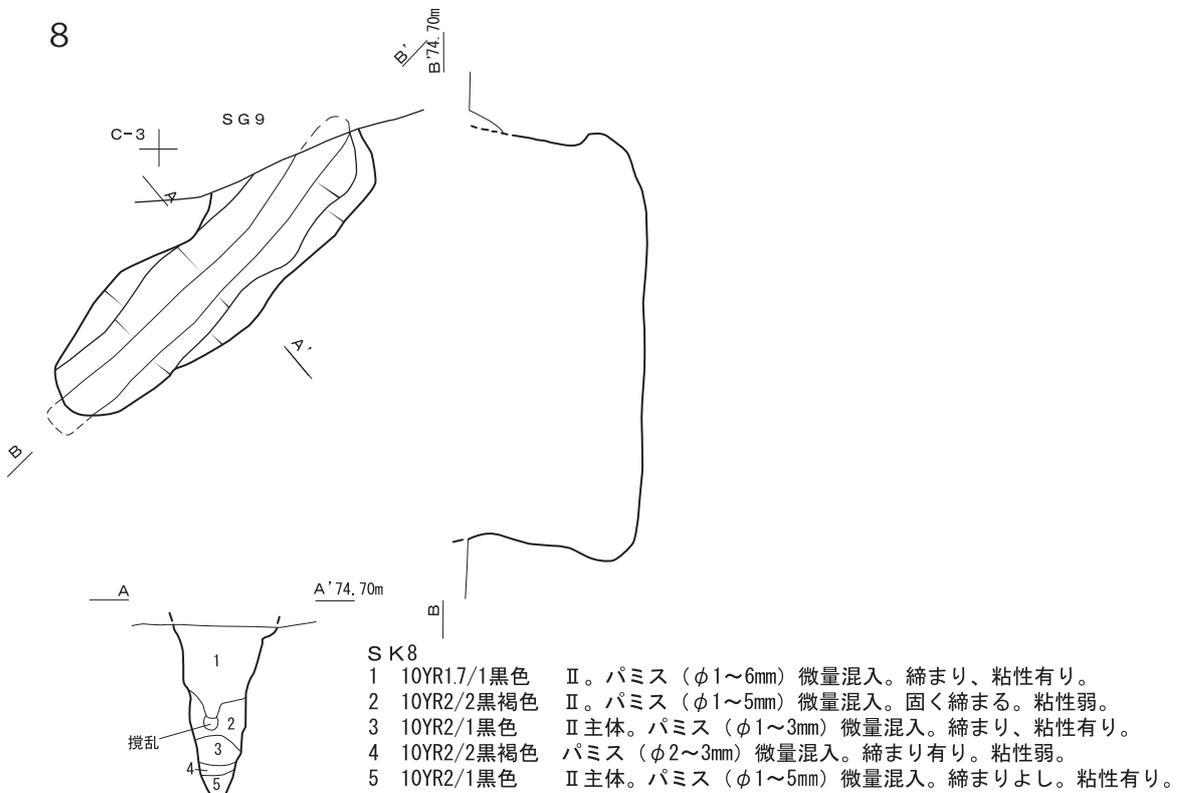
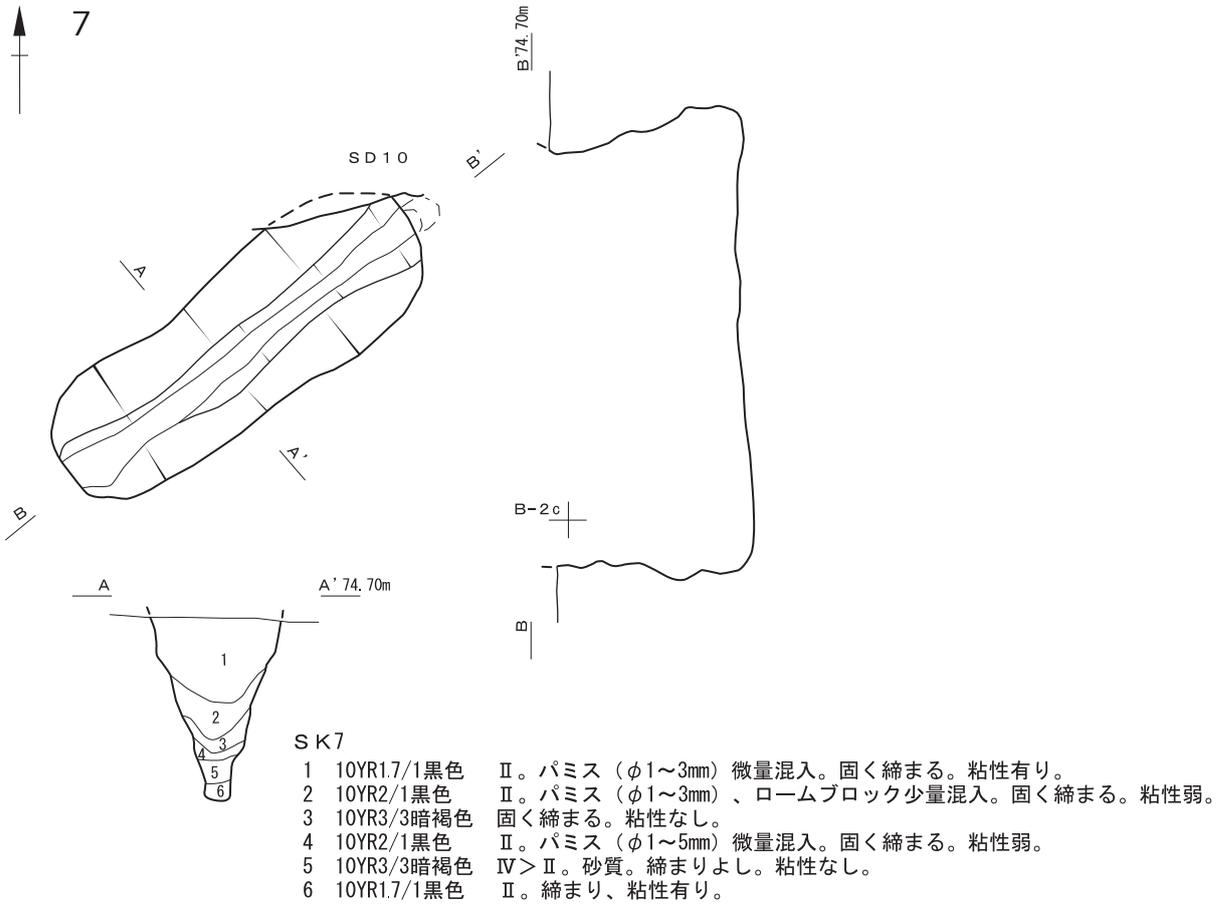
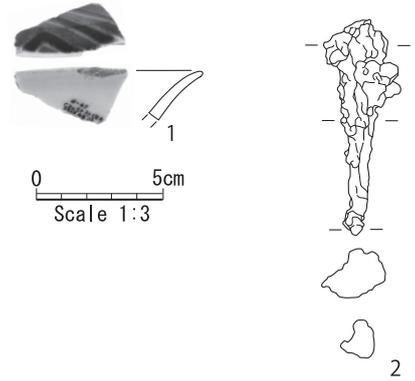
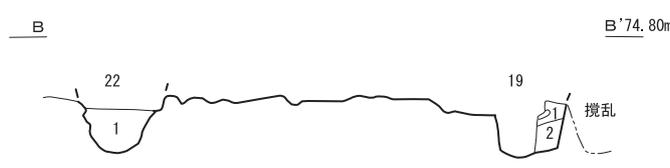
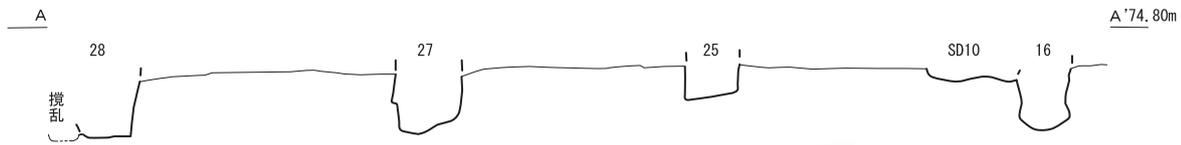
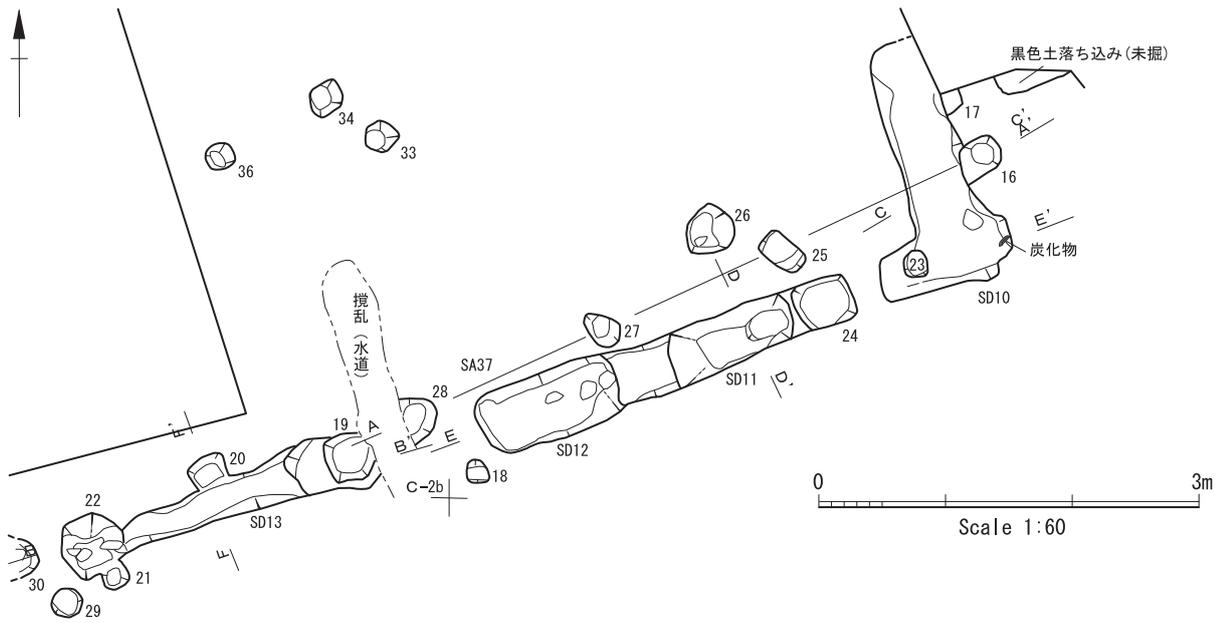
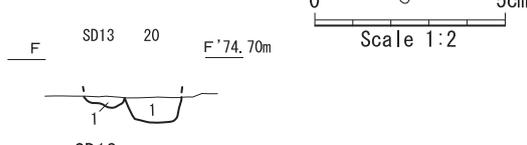
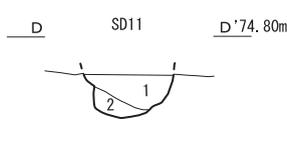
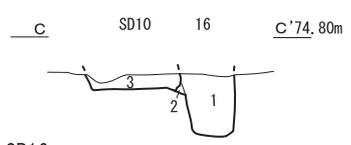


図8 落とし穴7・8

2 遺構と遺物



- SP22
 1 10YR2/1黒色 ロームブロック少量混入。締まり、粘性有り。
 SP19
 1 10YR2/1黒色 I。柔らかい。粘性有り。
 2 10YR2/1黒色 II。ロームブロック少量混入。締まり、粘性有り。



- SP16
 1 10YR2/1黒色 II。締まり有り。粘性弱。
 2 10YR1.7/1黒色 II。ロームブロック少量混入。固く締まる。粘性弱。
 SD10
 3 10YR2/1黒色 柔らかい。粘性弱。
 SD11
 1 10YR2/1黒色 II。ローム微量混入。締まり有り。粘性弱。
 2 10YR1.7/1黒色 II。ローム粒微量混入。締まり有り。粘性弱。

- SD13
 1 10YR2/1黒色 II。締まり、粘性有り。
 SP20
 1 10YR1.7/1黒色 II。締まり、粘性有り。

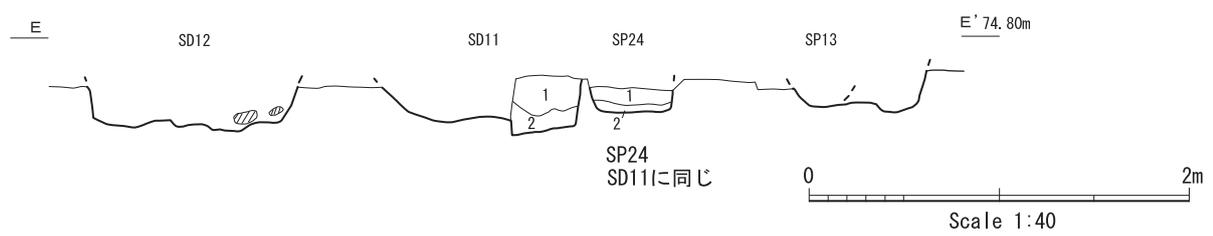


図9 柱列37、溝10~13、柱穴と遺物



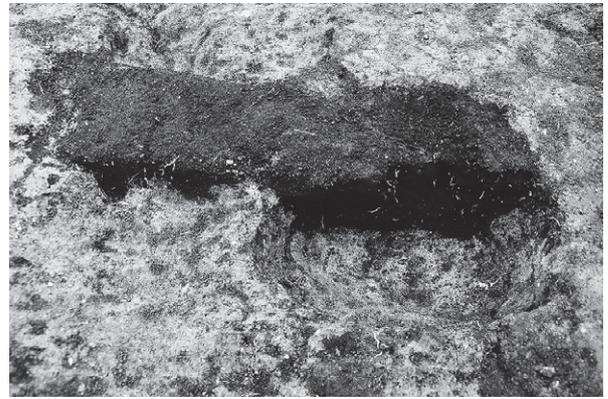
落とし穴7



落とし穴8



溝10・柱穴16



溝13・柱穴20



柱穴22遺物出土状況



2

図版2 落とし穴7・8、溝10・13断面、柱穴22と遺物

3) 池跡

調査区内からは1基の池跡と考えられる遺構が発見された。発掘区の端に位置しているため、調査できたのは一部であり、全容は明らかでない。落とし穴と重複関係にある。

池跡9 (図10)

位置 本遺構は、B-3、C-2・3区に位置する。IV層上面で黒色土の落ち込みとして発見した。北側と西側は今回の調査対象地区の外である。調査できたのはごく一部である。なお、本調査に先立ち実施した試掘調査ではC-3区を発掘したが、近現代のゴミに混じって自然礫が多量に出土し、深さ1.5mまで掘削しても基盤層に到達しなかったため、攪乱として報告した。検出された範囲の規模は長径6m、深さ0.8mであるが、全体の規模は不明である。南側で落とし穴8を切っている。

遺構 本遺構は、不整形な形態をもつ遺構で、池跡と考えられる。素掘りで粘土の貼付層などは確認されなかった。

遺構の規模は、最大で6m以上、南北方向で4.12m、確認面からの深さは0.8mを測る。壁面は、55°程の傾きで直線的に立ち上がる。壁面は凹凸を持つ。底面は調査対象外としたため、確認できなかった。

埋土は1層：黒色土、2層：ロームを少量含む黒色土、3層：締まりのある黒色土、4層：ロームブロックを少量含む黒色土。

遺物 総計62点の遺物が出土した。陶磁器類は61点と比較的少ない。器種組成では5器種、推定個体数は磁器4・陶器1個体の計5個体となるが、大半が小片で、遺存度の高いものは図示した程度である。図11-1～5は磁器、6～9は陶器、10は土風炉である。8の片口は口縁部破片が本遺構から出土したものであるが、隣接地の立会で同一個体とみられる破片が出土し、図上復元した。

時期等 陶磁器片の時期を見ると、18世紀の遺物が主体を占めていることから見て、これらが遺構の時期を示していると考えて支障ない。構築年代は不明であるが、廃絶年代については、陶磁器類の年代傾向から、18世紀後半と考えられる。用途は大きさや特徴から見て池であったことが推測されるが、一部を確認したに過ぎず、詳細を知る手がかりは得られていない。

4) 柱穴・柱穴様ピット

調査区内からは杭列等にならなかった柱穴・柱穴様ピットは落とし穴7の東側に2基、落とし穴8の東側に2基、西側に4基、溝10～13内及び周辺に11基分布している。径は20～50cmの規模で、深さは5～35cm。掘り方はいずれもほぼ垂直である。埋土は腐植土からなるものがほとんどである。これらの用途・時期については不明な部分が多いが、落とし穴7・8付近と溝10～13付近にあるものは、これらに関連する柱穴の可能性がある。遺物はS P22から棒状鉄製品が1点出土した(図9-2)。

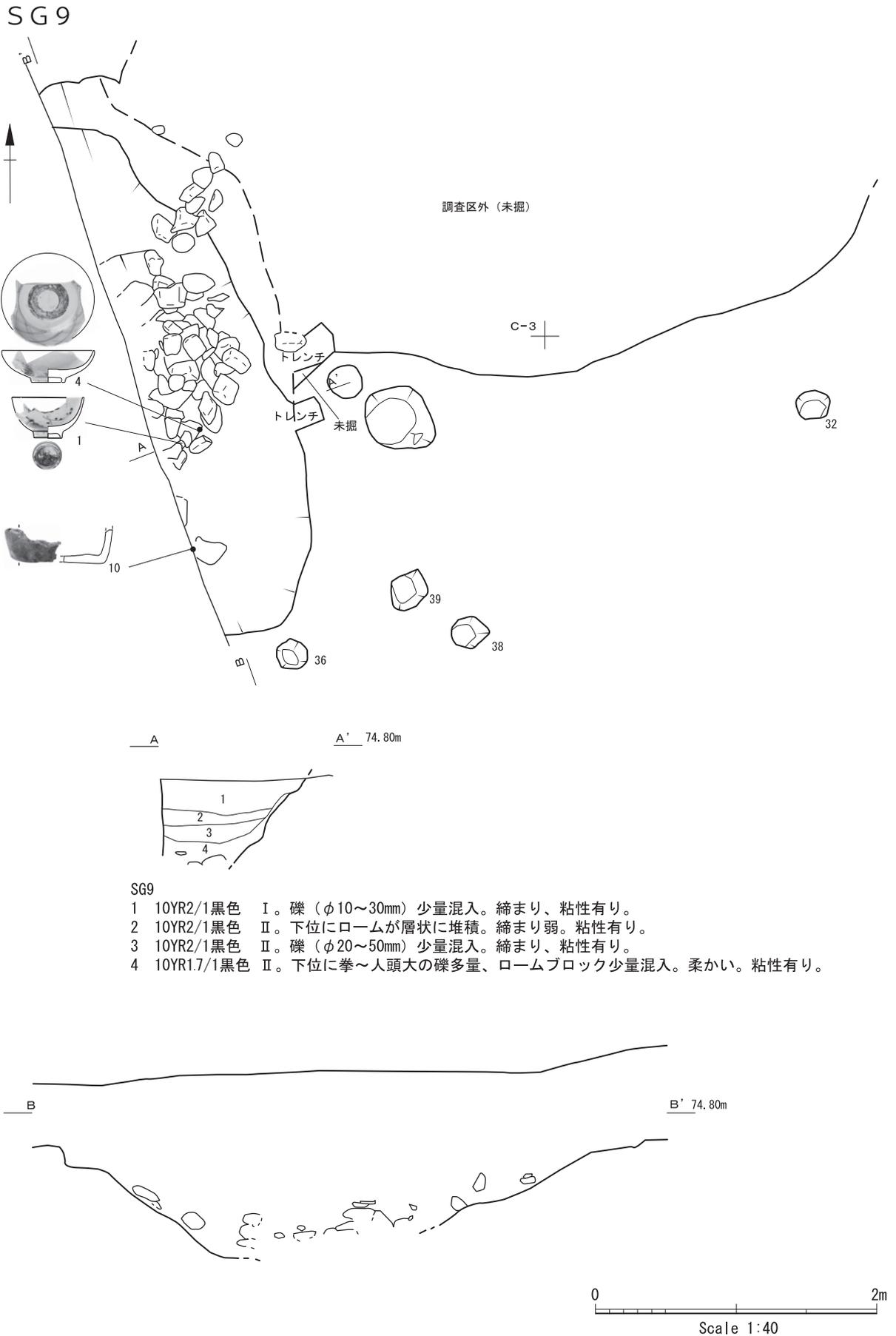


図10 池跡9

2 遺構と遺物



图11 池跡9 出土遺物



池跡9全景（北から）



池跡9土層断面



池跡9遺物出土状況

図版3 池跡9

3 発掘区の遺物

(1) 陶磁器・土器

磁器（図12-1～7）

碗類（図12-1～3）：1・2は染付磁器の中碗。3は白磁または染付。

皿類（図12-4～6）：4は内面に斜格子文が施された磁器で肥前IV期の波佐見系に相当する。5・6は高台部が角形で高台内に砂が付着している。5は玉取獅子文が描かれた中国産磁器。

仏飯器（図12-7）：7は染付が付けられた仏飯器。

陶器（図12-8～12、図13-1～5）

碗類（図12-8）：8は鉄釉がかかる碗。

皿類（図12-9・10）：9は灰釉、10は銅緑釉が施された皿。

鉢類（図12-11・12、図13-1～3）：11は回転糸切痕をもつ無台の播鉢。12・1・2は高台をもつタイプ。12は同一個体の破片から図上復元を行ったもので、口径32.2cm、底径14.8cm、器高14.8cmほどになるとみられ、大型の片口播鉢である。1・2は高台を付けた播鉢で、壁面の櫛目は見込みの中央まで隙間なく削り込まれる。3は無釉の体部。

甕類（図13-4・5）：4は二彩絵で松が描かれる中甕。5は玉縁状の口縁部をもち、外面に鉄釉を施した後、内面に灰釉が施される陶器で、製作地は不明である。C-3a区より出土した。

土器（図13-6）：6は舌状の張り出しが付く土風炉。底部に小さい足が付く。

(2) 金属製品

銭（図13-7・8） 7・8は寛永通宝である。

(3) 石製品

砥石（図13-9・10） 9・10は3面を砥面としている。9は凝灰岩、10は泥岩を用いたとみられる。

硯（図13-11・12） 11・12はいずれも表面を欠損しているが、方形で硯とみられる。

不明石製品（図13-13～15） 13～15は同一個体とみられる石製品で、被熱・風化のためか脆くなっている。全体形など器種不明の石製品である。

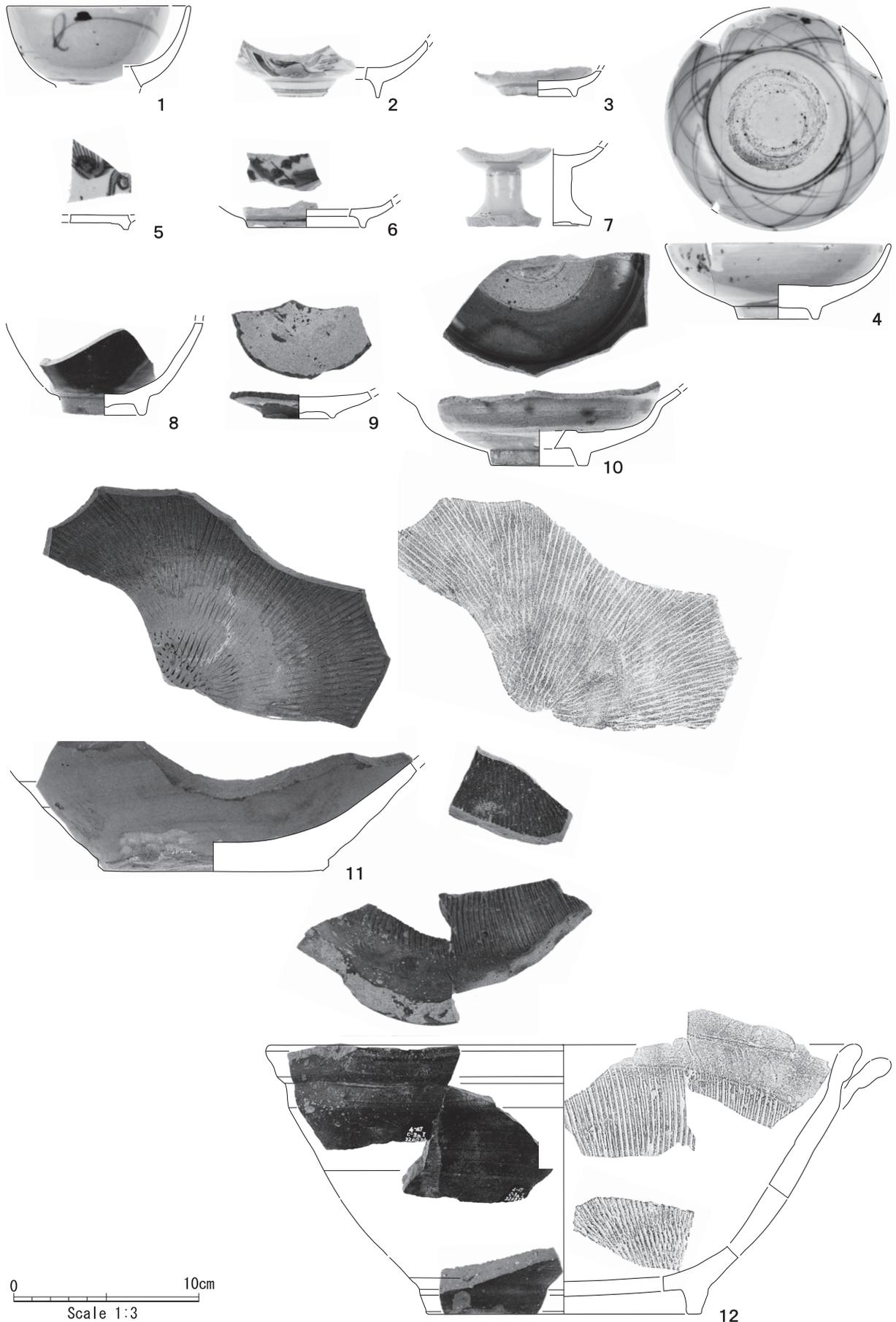


図12 発掘区の遺物(1)

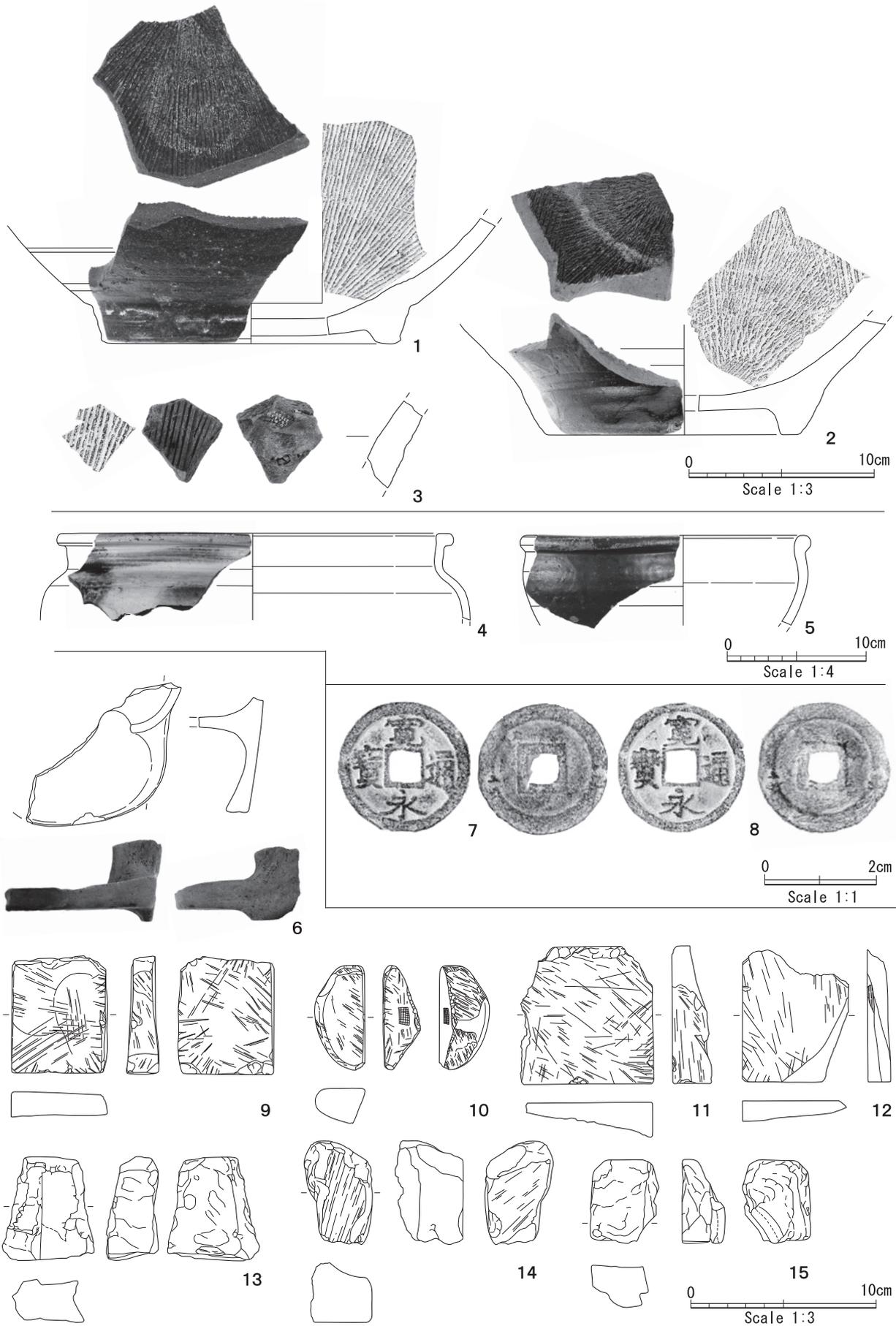
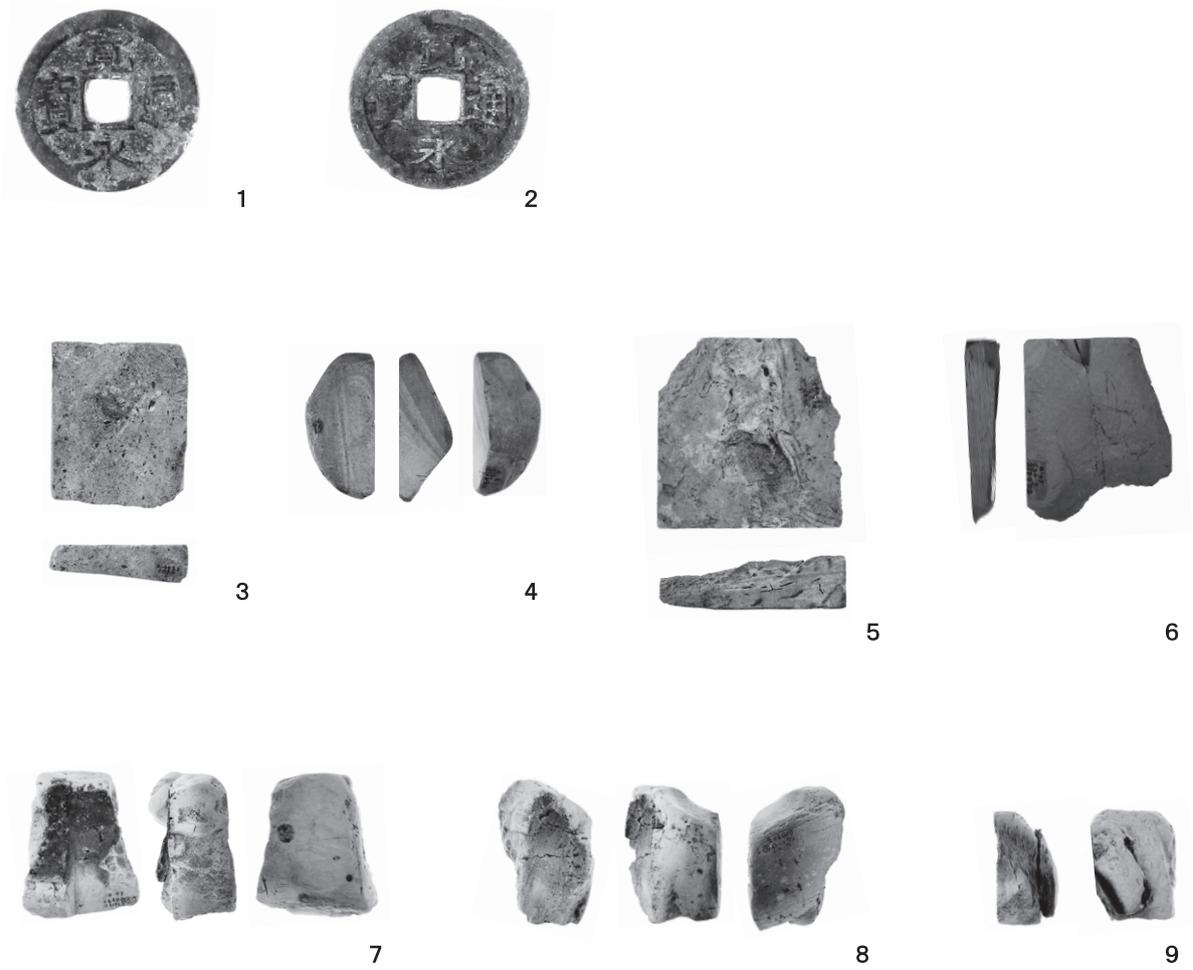


図13 発掘区の遺物(2)



図版4 発掘区の遺物

4 工事立会

本遺跡の道路部分のうち遺構面まで掘削が及ぶ箇所については発掘調査を実施したが、宅地造成事業用地内に遺構が検出される可能性があるため、宅地箇所と敷地南西部の切土工事実施箇所の計1,250㎡ほどを工事立会区域とし遺構確認調査を実施した。

工事立会区域は2地点に分かれているため、便宜上西側から、A地区、B地区と呼ぶこととした。A地区の調査は、はじめにバックホウで表土を除去し、その後、ジョレンによりIV層上面を精査し遺構の確認につとめた。

(1) 工事立会A地区

敷地南西部の道路に接する約62㎡を重機により表土を除去し、遺構の確認調査を実施したが、溝1条と柱穴様ピット1基を検出しただけで、出土遺物は磁器片2点のみである。

溝38 (図14)

調査区の東部に、黒色土の落ち込みとして検出した。長軸方向は北から68°東へずれ、東側は調査区外にさらに延びる。確認した部分での長径は3.1m、幅0.4mほどの溝状のプランで、確認のみのため深さ等は不明である。溝11・12と長軸方向が一致し、平面形も類似することから、江戸時代以降の地割溝と考えられる。

(2) 工事立会B地区

敷地東側の区域において幅13～20m、長さ50m、約1,200㎡を重機による掘削が実施され、遺構の有無等の立会調査を実施した。道路工事の立会では大型の土坑状の落ち込み1ヵ所、柱穴5基、焼土1ヵ所を確認し、陶磁器片19点、石製品4点を得た。宅地造成の立会では掘削がIV層まで達しないよう調整したため、遺構は確認されず、遺物は陶磁器片147点、土器片7点を得た。

磁器 (図15-1～16)

碗類 (図15-1～5)：1は甕形の口縁部が外反する白磁の小碗。道路側溝工事で出土した。2・3は染付の磁器中碗で、2は雨降文、3は松文を描いている。2は宅地造成工事、3は道路側溝工事で出土。4・5は宅地造成工事出土の染付碗である。4はよろけ縞が描かれる。5は底部が厚く、見込みに五弁花のコンニャク印判が配された磁器。高台内には角の中に銘がある。

皿類 (図15-6～9)：6は白磁の極小皿で肥前系磁器に比定できる。7～9は肥前・肥前系磁器。7は碁笥底で、見込みに山水文が描かれる。高台脇に砂が付着している。

鉢類 (図15-10・11)：10・11は香炉。10は外面のみ瑠璃釉が施釉される。11は柘榴とみられるものが染付される。

瓶類 (図15-12)：12は青磁の仏花瓶。

蓋類 (図15-13)：13は内面天井部に草花と二重圏線を染付した碗の蓋。

紅猪口 (図15-14・15)：14・15は陰刻による変形菊花形の紅猪口。

水滴または人形 (図15-16)：16は色絵の水滴または人形である。宅地造成工事で出土している。

陶器 (図15-17・18)：17はロクロ整形痕を残し、壁面の櫛目は見込みの中央まで削り込まれた楕

鉢である。18は口縁部が端反となり、灰釉がかかった徳利である。いずれも宅地造成工事で出土している。

土器（図15-19）：19は土風炉。底部に足が付く。宅地造成工事で出土した。

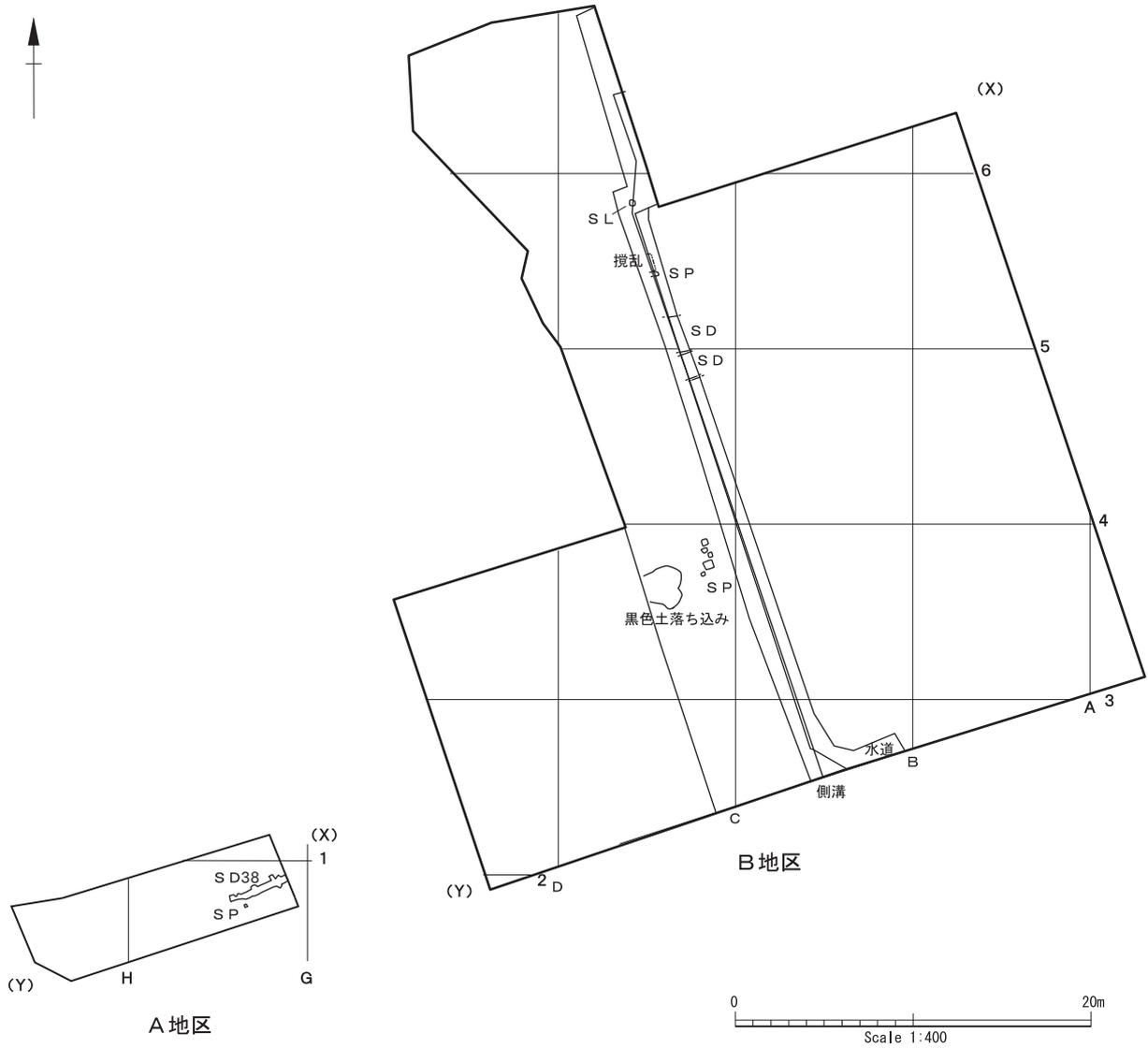
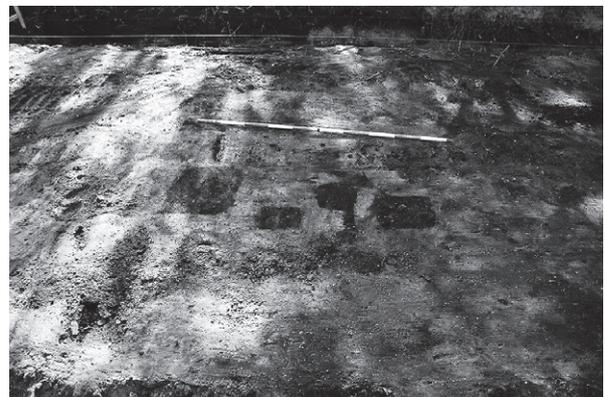


図14 工事立会区と遺構配置図



A地区遺構検出状況



B地区柱穴検出状況

図版5 工事立会調査状況

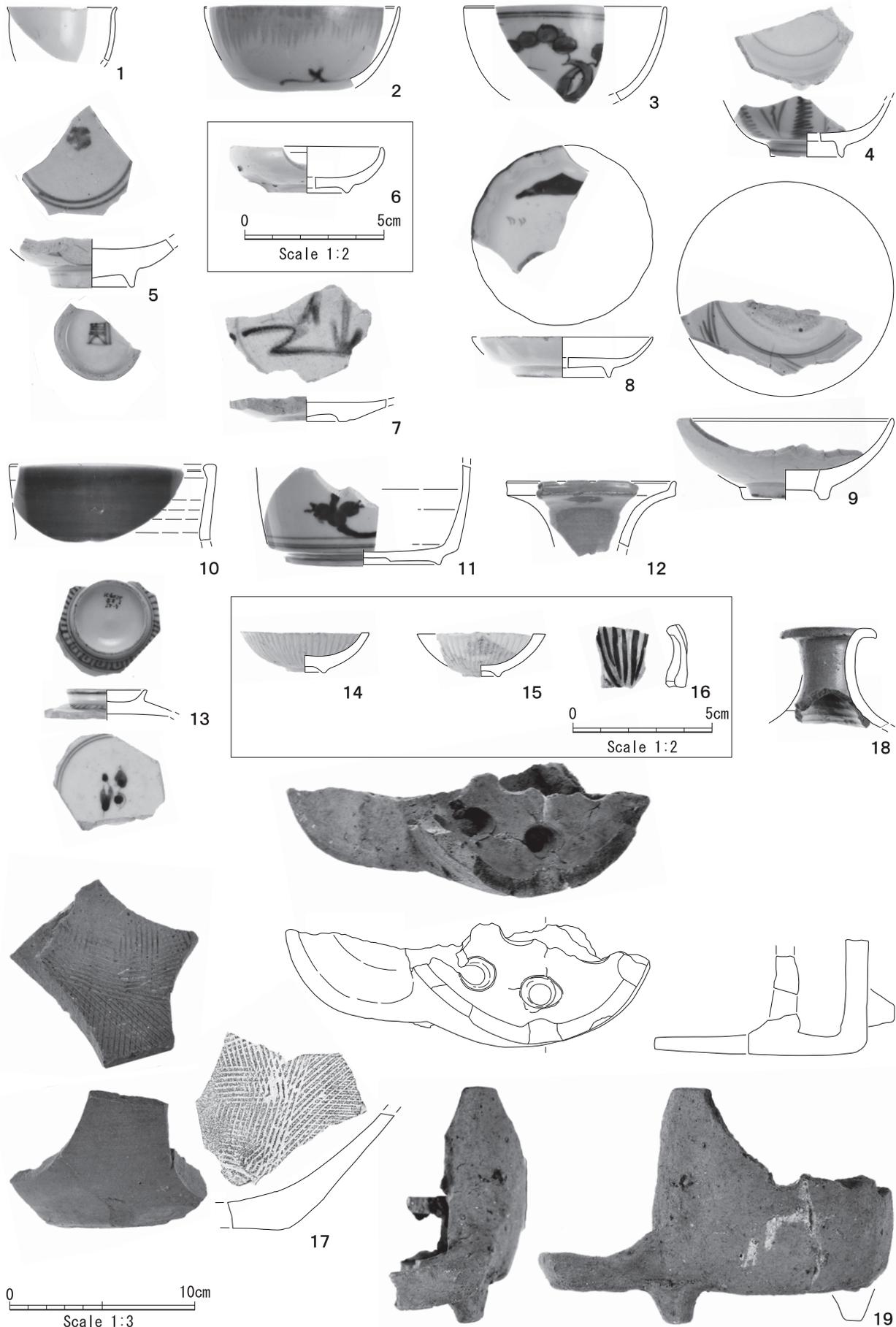


図15 工事立会区出土の遺物

5 要約

今回の調査は金坂遺跡の第1次調査となる。結果、落とし穴・溝など27基の遺構、陶磁器・金属製品・石製品など499点の遺物などの資料を得ることができた。本書はこれらの貴重な資料の調査記録としては不十分であるが、今後も継続される本遺跡の発掘調査に課題を残す意味で、本項で今回の調査の概要をまとめてみたい。

(1) 遺構

縄文時代の遺構では2基の落とし穴が発見されたが、同一時期の落とし穴と思われる。落とし穴からは土器は出土しなかった。伴出資料はないが、過去の県内の調査成果（築瀬2007）から2者ともに中～後期の時期の所産である可能性が高い。落とし穴は大館段丘南縁部の萩ノ台Ⅱ遺跡（滝内2008）や池内遺跡（秋田県埋蔵文化財センター編1997）で検出例があるが、大館段丘北縁部では初めての発見となる。

江戸時代の遺構では池跡と考えられる遺構が1基発見された。調査できたのは全体の一部である。池跡9は下層より江戸時代中期の18世紀の染付磁器が出土しており、共伴する可能性が高い。しかし、埋土中から1点のみ出土した肥前陶器の灰釉皿の年代観から17世紀前葉まで遡る可能性も否定できない。大館城下における池に関わる遺構は、本丸で検出された州浜と考えられる石敷遺構（嶋影2019）、二ノ丸で発見された池跡（馬庭2021）に続き3例目となる。溝は4条が発見された。出土遺物は僅かであるが、形態・規模との関連から、これらの溝は主として江戸時代後期の地割溝と推定された。しかし本書では溝に対して概括的な検討を加えたにすぎず、決して十分な検討にはなっていない。今後、溝の形態・規模・埋土状況・配置・遺物の出土状況等の総合的な比較検討によって、不明点を解決していきたい。

(2) 遺物

陶磁器：戦国時代の中国磁器、肥前陶磁器など、近世各期の陶磁器が出土した。江戸時代中期から後期の陶磁器が主であった。

石製品：砥石・硯などが出土した。砥石には方形・円礫を用いたものがある。

金坂遺跡は平安時代から中世として台帳に登録された遺跡であったが、今回の調査で、縄文時代から江戸時代に至る、長い期間を通じて人々の足跡の残された複合遺跡であることが明らかとなった。

引用参考文献

- 秋田県埋蔵文化財センター編 1997 『池内遺跡－国道103号道路改良事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅷ－遺構篇』 秋田県文化財調査報告書第268集 秋田県教育委員会
- 嶋影壮憲 2019 「第2章 大館地区の調査 2大館城跡①」『大館市内遺跡詳細分布調査報告書(5)』 大館市文化財調査報告書第15集 大館市教育委員会
- 滝内 亨 2008 「第2章 調査の記録 8萩ノ台Ⅱ遺跡」『大館市内遺跡詳細分布調査報告書』 大館市文化財調査報告書第2集 大館市教育委員会
- 馬庭和也 2021 「発掘調査からわかった大館城」『秋田歴史協会誌』第76号 秋田県歴史研究者・研究団体協議会
- 築瀬圭司 2007 「第6章 まとめ」『根下戸道下遺跡（第2次）』 秋田県文化財調査報告書第428集 秋田県教育委員会

表3 種別遺物一覧

摘要	P	S	I	N	計
遺構	65		1		66
発掘区	240	13	2	1	256
小計	305	13	3	1	322
工事立会分	173	4			177
計	478	17	3	1	499

表4 柱列一覧

遺構番号	位置	平面形	規模			長軸方向 N→E	時期	備考
			確認面(m)	底面(m)	深さ(m)			
S A37	B・C-2	—	5.00 × —	—	—	65°		
S P16	B-2	円	0.30 × 0.26	0.17 × 0.16	0.33			
S P25	B-2	長円	0.36 × 0.28	0.22 × 0.20	0.17			
S P27	B-2	円	0.25 × 0.24	0.14 × 0.13	0.31			
S P28	C-2	円	0.33 × 0.26	0.23 × 0.17	0.29			

表5 落とし穴一覧

遺構番号	位置	規模			長軸方向 N→E	備考
		確認面(m)	底面(m)	深さ(m)		
S K7	B-2	2.23 × 0.70	2.50 × 0.12	1.00	53°	
S K8	B・C-2	2.24 × 0.60	2.30 × 0.13	0.94	43°	

表6 溝一覧

遺構番号	位置	規模			長軸方向 N→E	備考
		確認面(m)	底面(m)	深さ(m)		
S D10	B-2	2.00 × 0.45	— × 0.39	0.07	160°	S P16→S D10。S D11～13は一連の遺構と考えられる。区画施設か。
S D11	B-2	1.00 × 0.43	— × 0.28	0.31	68°	
S D12	B-2	1.08 × 0.47	1.03 × 0.38	0.22	68°	
S D13	C-2	1.70 × 0.29	1.70 × 0.15	0.04	71°	

表7 池跡一覧

遺構番号	位置	平面形	規模		長軸方向 N→E	時期	備考
			確認面(m)	深さ(m)			
S G9	B-3、C-2・3	—	5.50 × —	0.90	—	17～18世紀	

表8 柱穴・柱穴様ピット一覧

遺構番号	位置	平面形	規模		埋土	備考
			確認面(m)	深さ(m)		
S P14	B-2	—	0.45 × 0.36	0.07	10YR2/1	S D13と重複、新旧不明。
S P15	B-2	長円	0.24 × 0.24	0.21	10YR1.7/1	
S P17	B-2	円	0.26 × —	0.11	10YR2/1	
S P18	B-2	円	0.20 × 0.19	0.06	10YR2/1	
S P19	C-2	円	0.44 × 0.38	0.33		
S P20	C-2	隅丸方形	0.30 × 0.28	0.14		
S P21	C-2	円	0.21 × 0.19	0.06	10YR2/1	
S P22	C-2	円	0.46 × 0.43	0.25		
S P23	B-2	円	0.25 × 0.23	0.06	10YR2/1	
S P24	B-2	隅丸方形	0.50 × 0.42	0.17		
S P26	B-2	円	0.44 × 0.34	0.15	10YR2/1	
S P29	C-2	円	0.25 × 0.24	0.04	10YR2/1	
S P30	C-2	—	0.30 × —	0.19		
S P31	B-2		0.21 × 0.20	0.07	10YR1.7/1	
S P32	B-2	円	0.27 × 0.22	0.09	10YR2/1	
S P33	C-2	不整形	0.25 × 0.24	0.07	10YR2/1	
S P34	C-2	隅丸方形	0.27 × 0.26	0.10	10YR2/1	
S P35	C-2		0.45 × 0.44	0.17		
S P36	C-2	円	0.24 × 0.20	0.10	10YR2/1	

表9 分類別遺物一覧

分類	P				S				I	N	合計
	8			計	1		4	計			
	1	2	3		7	9					
出土位置											
本調査遺構	S D13	1			1						1
	S G9	47	14	1	62						62
	S P19	1			1						1
	S P21	1			1						1
	S P22								1		1
	小計	50	14	1	65				1		66
発掘区	A・B-3	26	4		30						30
	B-2b	1	1		2						2
	B-2c	5	4	2	11	1			1		12
	B-3a	5	2		7						7
	B-3b	2	2		4						4
	B-3c	19	1		20				1		21
	B-3d	5			5						5
	B-4c	3	1		4						4
	B-4	4			4						4
	B-4・5	1	3		4						4
	B-5	2			2						2
	B-6	1			1						1
	C-2b	1	1		2	1			1		3
	C-2c	1			1						1
	C-3a	41	17	8	66	1		4	5		71
	C-3b	2			2						2
	C-3c	1			1						1
	C-4a			1	1						1
	C-4b	2			2						2
	C-5c				0					1	1
	C-6d	5	1		6						1
	D-5	8	1		9						9
	D-6		1	1	2		5		5		7
表土・攪乱	48	6		54	1			1		55	
小計	183	45	12	240	4	5	4	13	2	1	256
試掘調査	D-3S D	8	3		11						11
	H-1S D	1	3		4						4
	発掘区	93	26	6	125			3	3		128
	小計	102	32	6	140			3	3		143
工事立会	A地区	2			2						2
	B地区	133	31	7	171		4		4		175
	小計	135	31	7	173		4		4		177
合計	470	122	26	618	4	9	7	20	3	1	642

表10 磁器遺構破片集計

遺構種類	S D	S G	S G	S G	S G	S P	S P	S D	S D
遺構番号	13	9	9	9	9	19	21	D-3	H-1
遺構内層名	埋土	1	2	3	埋土	埋土	埋土	試掘	試掘
磁器・染付	碗			1	1	12		1	2
	皿					5			
	鉢						1		
	碗∨皿∨鉢	1				2		2	1
	壺								
	瓶		1					1	
	髪油壺								
	その他袋物								
	壺∨瓶								
	蓋								
	蓋物								
	猪口					1			
	紅猪口								
	猪口∨紅猪口								
	仏飯器								
散蓮華									
注水									
器種不明					5			3	
磁器・色絵	碗								
	皿								
	鉢								
	碗∨皿∨鉢								
	壺								
	瓶								
	髪油壺								
	その他袋物								
	壺∨瓶								
	蓋								
	蓋物								
薄手酒杯									
器種不明									
磁器(瀬戸)	碗								
	皿								
	鉢								
	碗∨皿∨鉢								
	蓋								
器種不明									
磁器・青磁	碗								
	皿								
	鉢								
	碗∨皿∨鉢								
	壺								
	瓶								
	髪油壺								
	その他袋物								
	壺∨瓶					1			
	仏飯器								
注水									
器種不明					2				
磁器・白磁	碗					2			
	皿								
	鉢								
	碗∨皿∨鉢								
	壺								
	瓶								
	髪油壺								
	その他袋物								
	壺∨瓶								
	蓋								
	蓋物								
	猪口								
	紅猪口								
薄手酒杯									
猪口∨紅猪口									
器種不明					1				

表11 磁器発掘区破片集計

層名		I	I	I	I	I	I	I	I	I	I	I	I	I	I	I	I	I	試掘	表採	立会	
発掘区		A・B-3	B-2b	B-2c	B-3a	B-3b	B-3c	B-3d	B-4c	B-4	B-4・5	B-5	B-6	C-2b	C-2c	C-3a	C-3b	C-3c				
磁器・染付	碗	9		1			3	1	2	1		1				12			23	14	39	
	皿	8		1	3	1	5	1	1	1	1		1			12	1		14	13	24	
	鉢																				2	
	碗∨皿∨鉢	1											1			1	6		14	5	18	
	壺															1			1	1		
	瓶															1			3	1	5	
	髪油壺																					
	その他袋物				1												3					
	壺∨瓶																			1	3	
	蓋			1													2			1	1	1
	蓋物																1			2	2	7
	猪口							1												2		1
	紅猪口																					
	薄手酒杯																					
猪口∨紅猪口																						
仏飯器																				1		
散蓮華																						
器種不明	4	1			1	11	2			2									9	4	18	
磁器・色絵	碗																					
	皿							1														
	鉢																					
	碗∨皿∨鉢																					
	瓶																			1		
	髪油壺																					
	その他袋物																					
	壺∨瓶																					
蓋																						
蓋物																					3	
薄手酒杯																						
器種不明																						
磁器(瀬戸)	碗															1					2	
	皿															1				4		
	鉢																					
	碗∨皿∨鉢																				1	
	蓋																					
蓋物																						
磁器・青磁	碗			1																2	1	
	皿			1																	3	
	鉢																					
	碗∨皿∨鉢																			2	1	
	瓶																				2	
	その他袋物																					
	壺∨瓶																	1			1	
	猪口																			1		
注水																						
器種不明																				1		
磁器・白磁	碗	1																		2	2	
	皿													1								
	鉢																					
	碗∨皿∨鉢															1				3		
	壺																					
	瓶																				2	
	その他袋物																			1		
	壺∨瓶	2																				
	蓋																					
猪口																						
紅猪口	1																					
猪口∨紅猪口																						
器種不明						1														2		
瑠璃釉	碗																					
	鉢																				1	
半磁半陶	碗																					
	皿																					
	鉢																					
磁器・中国	碗																				1	
	皿				1													1		2		
	鉢																					
	碗∨皿∨鉢																					
器種不明																				2		

表12 陶器破片集計

遺構種類	S G		S D	
	9		試掘D-3	試掘H-1
遺構内層名	埋土	下層	埋土	上層
碗	3			
皿	3			
鉢	3			
碗∨皿∨鉢	1		2	1
壺				
瓶				
甕				
その他袋物				
壺∨瓶∨甕				
播鉢	1	1		
土瓶				
急須				
注水				
土鍋				
土瓶∨土鍋			1	
蓋				
蓋物				
鬘罎				
火鉢				
灯火具				
器種不明	2			2

層名	I	I	I	I	I	I	I	I	I	I	I	攪乱		表採	
調査区	A・B-3	B-2b	B-2c	B-3a	B-3b	B-3c	B-3d	B-4c	B-4・5	C-2b	C-3a	C-3a	試掘		立会
碗											2		1	1	2
皿	1		1		2								5		2
鉢	1			1				1			3				6
碗∨皿∨鉢				1					1				2		2
壺														1	1
瓶											1		1		2
甕															1
その他袋物													1		
壺∨瓶∨甕						1				1	3		4	1	3
播鉢			3						1		5			3	8
土瓶															
急須															
注水															
土鍋															
土瓶∨土鍋													3		2
蓋		1							1		1		1		
蓋物															
鬘罎															
灯火具															
火鉢															
植木鉢															
器種不明	2							2			1	1	8		2

表13 陶磁器個体集計

種別	産地	器種	器形	S G		
				9	B-3c	立会
				4層	I	I
磁器	肥前・肥前系	中碗	丸形	1		
		小皿	丸形	1		
	肥前・肥前系	紅皿	変形菊花形			2
陶器	肥前	小皿	丸形		1	

表14 土器個体破片集計

調査区遺構	破片数				
	S G 9	B-2c	C-3a	C-4a	D-5
層名	1	I	I	I	I
土師質土器	1	2	8	1	1

個体数	
調査区	立会B地区
層名	I
土師質土器	4

表15 掲載陶磁器・土器観察表

図番号	遺構・調査区	層位	種別	形態		規格(mm, g)			胎土		成形～焼成の特徴	施釉・文様・装飾		製作地	年代	備考
				器種	器形	口径	器高	底径	重量	質		記載部位	色			
9-1	SP19	埋土	染付	鉢	-							内：口・濃み縞(墨弾き)	肥前	Vの内(1800~1860)		
11-1	SC9	4	染付	中碗	丸形	96	55	38	112	磁	口～底	明灰	外：口～体・草花、高台脇2重圏線 内：大明年製]は崩れ、漆継ぎ	肥前	IVの内(1700~1780)	
11-2	SC9	埋土	染付	碗				44	33	磁	底	明灰白	内：底・菊花?+水裂文、 外：体・菊花?+水裂文	肥前	IV～Vの内(1750~1790)	
11-3	SC9	埋土	磁器?	碗	腰張形			44	24	磁	体～底	灰白	内：全面暗褐色釉、 外：体上・鉄釉	肥前カ	18cカ	
11-4	SC9	4	染付	小皿	丸形	124	43	44	136	磁	口～底	明灰	内：口～体・2重格子	肥前	IV～Vの内(1750~1790)	
11-5	SC9	埋土	染付	五寸皿	丸形	136	33	88	33	磁	口～底	明灰	内：口～体・草花、 外：体・唐草	肥前 (波佐見)	IV～Vの内(1700~1790)	
11-6	SC9	埋土	陶器	皿				52	52	陶	底	灰黄	内：底・灰白色灰釉、 外：体下灰白色灰釉	肥前	Iの内(1590~1610)	
11-7	SC9	埋土	陶器	中鉢	浅丸形	192			26	陶	口～体	灰白	内：全面・白色化粧土→透明釉、外：全面・白色化粧土→透明釉、刷毛目	肥前	IV～Vの内(1700~1790)	
11-8	SC9	埋土	陶器	片口	丸形	174	92	56	116	陶	口～底	鈍黄橙	内：全面・白色化粧土→透明釉、外：全面・白色化粧土→透明釉、刷毛目	肥前	IV～Vの内(1700~1790)	
11-9	SC9	下層	陶器	大擂鉢	口縁折縁形	270			53	陶	口～体	鈍黄橙	内：鈍赤褐色鉄漿、外：鈍赤褐色鉄漿、10本籬目	須佐・丹波	17c・1/2~ 18c・2/2	
11-10	SC9	1	土器	風炉?	七厘形				108	土師	底	橙	内：指押さえ→ナデ、 外：指押さえ→ナデ			
12-1		1	染付	中碗	丸形	100			40	磁	口～体	灰白	外：草花	肥前	IV～Vの内(1750~1790)	
12-2		表探	染付	碗	-				20	磁	体～底	灰白	内：見込・2重圏線、 外：体・草花	肥前	IV～Vの内(1690~1790)	
12-3	C-2b	1	染付 か 白磁	碗	-			42	15	磁	体～底	灰白	内外貫入 多	肥前	IV～Vの内(1700~1790)	
12-4	B-3c	1	染付	小皿	丸形	122	41	44	211	磁	口～底	明灰白	内：口～体・2重格子	肥前 (波佐見)	IV～Vの内(1750~1790)	
12-5	B-3	1	染付	皿						磁	底	灰白	内：見込・玉取獅子	中国 (景徳鎮 窯系)	16c・1/2	小野皿 B群

図番号	遺構・調査区	層位	種別	形態		規格(mm, g)			胎土		成形～焼成の特徴	露胎範囲	施釉・文様・装飾		製作地	年代	備考	
				器種	器形	口径	器高	底径	重量	質			記載部位	色				胎土
12-6	C-3b		染付	皿	-			64	8	磁	底	灰白	内高台脇に離れ砂	畳付	内：見込・草花	肥前カ	II～IIIの内 (1630～1660)カ IV～Vの内 (1700～1790)	
12-7	C-4b	I	染付	仏飯器	台底輪高台			18	55	磁	脚～底	灰白		畳付～高台内	外：体・1本線、脚・1本線	肥前	IV～Vの内 (1650～1790)カ	
12-8	C-3a	I	陶器	碗					44	陶	体～底	灰白			内：全面・暗褐色釉、 外：体・暗褐色釉	肥前カ	III～Vの内 (1650～1790)カ	
12-9	B-2c	I	陶器	皿				40	32	陶	底	褐灰	見込に砂目	体下～高台内	内：全面・灰白色灰釉、 外：体上・灰白色灰釉	肥前	IIの内 (1610～1630)	
12-10	D-6	I	陶器	皿	折縁形			56	99	陶	底	純黄橙	蛇目粗剥、 見込に砂目	体下～高台内	内：全面・銅緑釉→透明 釉、外：全面・透明釉	肥前 (内野山)	III(1650～1690)	
12-11	C-3a	I	陶器	擂鉢				120	498	陶	体～底	明赤褐	外底面回 転糸切	内面・外面	9本櫛目	肥前	III(1650～1690)	
12-12	C-3a	I	陶器	大擂鉢				148	247	陶	口～底	黄灰	内底に離れ砂		内：褐灰色鉄釉、 外：褐灰色鉄釉、7本櫛目	肥前	IV～Vの内 (1750～1790)	
13-1	B-3d	I	陶器	擂鉢				160	211	陶	体～底	灰褐			内：黒褐色鉄釉、 外：黒褐色鉄釉、9本櫛目	肥前	IV～Vの内 (1750～1790)	
13-2		表採	陶器	擂鉢				136	224	陶	体～底	明赤褐	内底に離れ砂		内：暗赤灰色鉄釉、 外：暗赤灰色鉄釉、9本櫛目	肥前	IV～Vの内 (1800～1860)	
13-3	C-4a	表採	陶器	擂鉢					29	陶	体	純黄橙			8本櫛目	越前	16c～17c・ 1/2	
13-4	D-5	I	陶器	中甕	甕形			284	95	陶	口～体	赤灰			内：口・白化粧土→口縁体 下・透明釉、外：口縁～ 体・白化粧土→鉄絵+オリー ブ黄色銅緑釉	肥前	IVの内(1690～1750)	二彩絵
13-5	C-3a	I	陶器	中甕	甕形			210	84	陶	口～体	黄灰			内：全面・浅黄色灰釉、 外：全面・黒褐色鉄釉	不明	不明	
13-6	D-5	I	土器	風炉?	七厘形				65	土師	底	橙	脚あり		内：ナデ、外：ナデ→ミガ キ	不明	不明	
15-1	B地区		白磁	小坏	甕形			60	5	磁	口～体	明灰白				肥前	IV～Vの内 (1690～1790)	
15-2	B地区	I	染付	中碗	丸形			106	32	磁	口～体	明灰白			外：口～体・雨降り	肥前	IV～Vの内 (1690～1750)	雨降りは濃みのみ
15-3	B地区		染付	中碗	丸形			110	16	磁	口～体	明灰白			外：口～体・松	肥前	IV～Vの内 (1690～1750)	
15-4	B地区	I	染付	碗	-			40	24	磁	体～底	灰白		畳付	内：見込・1重圏線、 外：体・よろけ縞	肥前系	Vの内 (1800～1860)	
15-5	B地区	I	染付	碗	-			46	73	磁	底	灰白	厚底	畳付	内：見込・五弁花、 外：高台内1重方枠「異字」 と1重圏線	肥前	IVの内 (1750～1780)	五弁花は印刷

図番号	遺構・調査区	層位	種別	形態		規格(mm, g)			胎土		成形～焼成の特徴	施釉・文様・裝飾		製作地	年代	備考
				器種	器形	口径	器高	底径	重量	質		記載部位	色			
15-6	B地区		白磁	極小皿	丸形	56	17	30	6	磁	口～底	灰白	疊付	肥前系	Vの内 (1800～1860)	
15-7	B地区	I	染付	皿	—			44	40	磁	底	灰白	疊付	肥前	IIの内 (1640～1650)	
15-8	B地区	I	染付	小皿	丸形	98	22	52	25	磁	口～底	灰黄	疊付	肥前	Vの内 (1800～1860)	
15-9	B地区	I	染付	小皿	丸形	117	40	45	43	磁	口～底	灰白	見込蛇目、疊付	肥前 (波佐見)	IV～Vの内 (1750～1790)	
15-10	B地区		瑠璃釉	香炉	半筒形	112			35	磁	口～体	明灰白	内：口～体	肥前	IV～Vの内 (1700～1790)	
15-11	B地区		染付	香炉	半筒形			84	78	磁	体～底	明灰白	内：体下～底、高台内の縁側	肥前	IV～Vの内 (1700～1790)	
15-12	B地区	I	青磁	仏花瓶	—	92			19	磁	口～頸	灰白		肥前	IV～Vの内 (1700～1790)	
15-13	B地区	I	染付	碗蓋	—	44			42	磁	鈕～天井	灰白		肥前	IV～Vの内 (1750～1790)	
15-14	B地区		白磁	紅猪口	変形 菊花形	46	14	14	8	磁	口～底	明灰白	体下～高台内	肥前	IV～Vの内 (1700～1790)	紅皿
15-15	B地区	I	白磁	紅猪口	変形 菊花形	46	15	14	5	磁	口～底	明灰白	体下～高台内	肥前	IV～Vの内 (1700～1790)	紅皿
15-16	B地区	I	色絵	水滴か 人形	—				2	磁	体	明灰白		肥前	III～IVの内 (1650～1730)	
15-17	B地区	I	陶器	搦鉢	—				169	陶	体～底	鈍赤褐		肥前	III(1650～ 1690)	
15-18	B地区		陶器	瓶	—	52			48	陶	口～頸	灰白		瀬戸 美濃	18c	登6期
15-19	B地区		土器	風炉	七厘形		130		413	土師	口～底	明赤褐				3点接合

表16 掲載鉄製品・石製品一覧

図番号	分類	名称	調査区・遺構	層位	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)	欠失の有無	形態	色	石材	備考
9-2	I	鉄製品	S P22	埋土	57	17	16	9		棒状			器種不明
13-9	S1-7	砥石		I	64	52	17	92	欠失有り(折損後再利用)	板状	10YR7/2にぶい黄橙	凝灰岩カ	3面使用、仕上げ砥
13-10	S1-7	砥石	C-2b	I	57	27	20	30		不整	2.5Y7/3浅黄	泥岩カ	5面使用、仕上げ砥
13-11	S1-7	硯	B-2c	I	75	72	21	84	表面・側面ほとんど欠失	長方形	2.5Y7/1灰白	凝灰岩カ	
13-12	S1-7	硯	C-3a	I	72	58	11	59	表面・側面ほとんど欠失	長方形	2.5Y6/4にぶい黄	泥岩カ	
13-13	S1-9	不明石製品	D-6	I	57	50	28	20.4		不整	2.5Y8/1灰白	不明	被火、13~15は同一個体
13-14	S1-9	不明石製品	D-6	I	56	36	37	18.6		不整	2.5Y8/1灰白	不明	被火
13-15	S1-9	不明石製品	D-6	I	46	36	23	10.4		不整	2.5Y8/1灰白	不明	被火

表17 銭貨一覧

図番号	分類	銭種	調査区	層位	外縁径 (mm)		内郭径 (mm)		厚さ (mm)		質量 (0.0g)	備考
					外径平均	内径平均	外径平均	内径平均	外縁厚 (mm)			
13-7	I	寛永通宝	B-3c	I	24.8	19.6	7.5	5.9	1.0	2.8		
13-8	I	寛永通宝	C-5c	I	24.3	20.0	7.2	5.7	1.2	2.8		

II 試掘・確認調査

1 大館城跡（大館市本庁舎建設事業）

(1) 調査の経緯

大館市字中城地区において、大館市本庁舎建設事業が計画されたことから、平成26年度から継続して確認調査を行っている。平成26～30年度の確認調査の結果については、『大館市内遺跡詳細分布調査報告書(5)』（大館市教育委員会編2019）に報告したとおりである。その確認調査の結果を踏まえ、前～後期工区内において平成28年～令和3年度にわたって発掘調査を実施した。

今回、市役所旧庁舎の上物解体工事が完了したことから、第二段階となる基礎撤去工事に先立ち、遺構の残存状況を確認することを目的とし、令和4年2月24日～3月11日の期間で確認調査を実施した。

(2) 遺跡の位置と周辺の環境

大館市中心部の大館段丘は、大館盆地の中央部に舌状に突き出た地形をなし、その規模は東西6km、南北2～3kmほどである。この段丘の北側、米代川支流の長木川左岸に大館城跡は所在する。遺跡の位置は、北緯40度16分17秒、東経140度33分51秒（世界測地系）である。標高は69～71mを測る。

遺跡の北東側約100mには、平安時代と中世の遺跡である金坂遺跡、西側約800mにも平安時代と中世の遺跡である土飛山館跡が所在する。

今回の調査地は、大館城の二ノ丸が位置していた場所であり、享保13年作成の大館城下絵図によれば、南東部が真言宗遍照院の末寺である千手院、北東部及び中央部が城内大手道、西部が佐竹西家家臣の前小屋鞆負と前小屋崑弥太の屋敷地にあたる。

(3) 調査の方法

調査にあたり、平面直角座標系のX・Y軸を座標系として設定した。調査トレンチは、2m×5mを基本として12本設定した。

また各トレンチ番号は平成26～30年に実施した確認調査のトレンチ番号を踏襲している。トレンチ内の掘削は、バックホーを用いて造成土を除去した後、江戸時代の遺物包含層である黒色土層（II層）まで掘り下げ、人力にて精査し遺構の記録・遺物の収集等を行った。

調査区内の基本層序は、造成土（I層）・遺物包含層（II層）・II層とIV層の漸移層（III層）・地山層（IV層）の4層に大別することができる。

I層 表土及び造成土層。

II層 黒色砂質土層。 10YR2/1 遺物包含層。締まり有り。

III層 暗褐色粘性土層。 10YR3/3 漸移層。

IV層 明黄褐色ローム層。 10YR6/8 地山層。

(4) 調査の結果

今回の調査により、調査区内からは土坑5基、カマド状遺構2基、堀跡(S D 1)1条、柱穴・柱穴様ピット40基が確認できた。遺物はS D 1の埋土中より磁器7点、その他の攪乱層及び造成土中より磁器4点、陶器1点が出土した。T R 35とT R 40で確認された焼土が伴う土坑は、規模と平面形態からいわゆる「カマド状遺構」に分類されるものであると推測される。先行する調査事例から帰属時期は中世と考えられ、大館市内においては貴重な中世の遺構である。またT R 31とT R 32で確認された堀跡は、かつて大館城内に存在した「馬出し」に伴う堀跡と考えられる。

1) 遺構・遺物

堀跡(S D 1)

遺構 T R 31とT R 32を調査中に、黒色土の落ち込みが確認できたことから発見した。平成26年度に確認調査を実施した際にもT R 1で部分的に検出されているが、今回の調査により南北間約4.7mの幅を持っていたことが想定される。掘削については調査区が狭い上、湧水が著しいことから、検出面より80cmほど掘り下げたところで中止した。

本遺構は、大館城下絵図に記載されていることから以前よりその存在は知られたものであったが、複数ヵ所の調査トレンチにおいて確認されていることから、良好な残存状況が窺える。したがって詳細な調査によって、実際の堀跡の規模・馬出しの構造等が明らかとなることが期待される。また、城郭の研究において馬出しの存在は、本丸の防御面を考察する上で重要な要素であることから大館城の構造等の解明・把握をする上で非常に有用と考える。

遺物 S D 1からは7点の遺物が出土している(図版5)。うち1～4は肥前産の磁器であり、帰属時期は17世紀中頃～18世紀後半頃と思われる。1は染付の碗の破片である。2は染付の小皿であり、見込みに獅子と山水文が描かれるものと思われる。帰属時期は1630～40年代。3は染付の仏飯器である。帰属時期は17世紀後半～18世紀前半。4は染付の瓶類である。帰属時期は18世紀頃。5～7は瀬戸・美濃産の磁器で、その帰属時期は19世紀初頭～中頃と考えられる。5・6は染付の端反碗。5は小碗で体部に隸字体文が描かれる。6は碗の口縁部であり、齋手文が描かれる。7は染付の皿であり、被熱が著しい。

2) 取り扱い

過去の調査結果から江戸時代の遺物包含層であるII層の堆積が、表土から比較的浅い深度かつ複数の調査トレンチ内で確認できた。また遺構は、ほぼ全ての調査トレンチ内から検出することができたことを踏まえると、市役所旧庁舎の基礎により掘削されている範囲以外では比較的良好的な残存状況であることが窺える。また上述したように馬出しに伴う堀跡が検出されたことから、大館城の防御面を考察するうえで非常に重要な遺構を確認することができた。については上記の結果を鑑み、今回の旧庁舎基礎撤去工事においては、対象部分となる2,600㎡の面積に対し、遺構の破壊が懸念されることから事前の本発掘調査が必要と判断し、令和4年5月から本発掘調査を実施している。

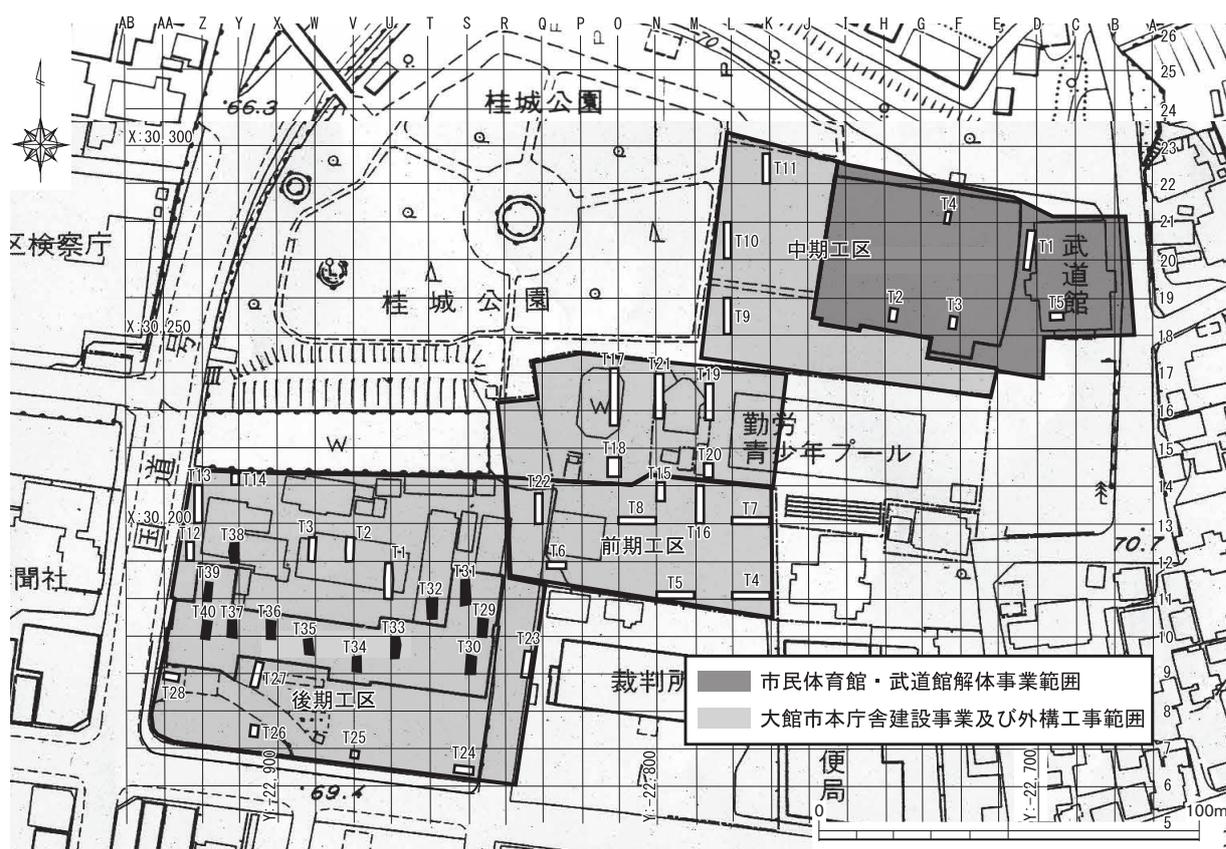


図 16 大館城跡調査区と周辺の地形 (1:2,000)

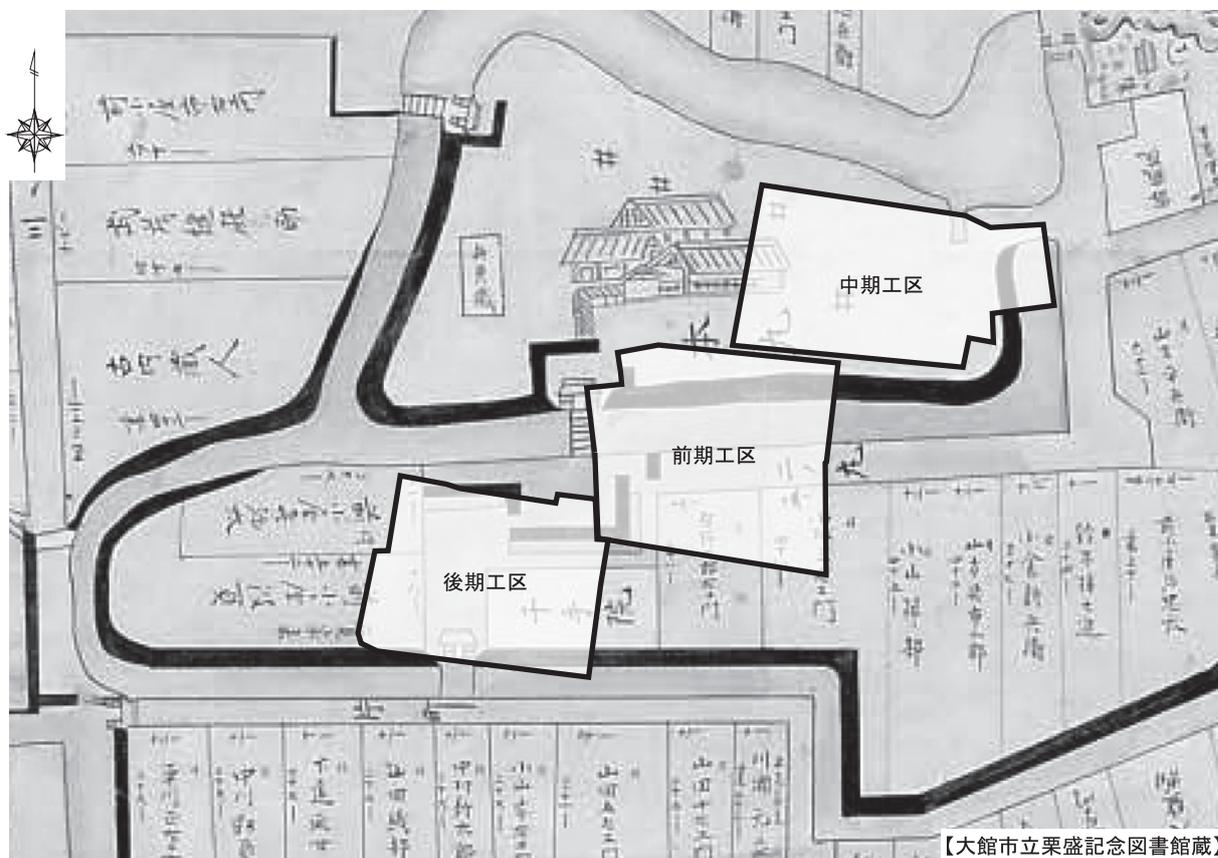


図 17 大館城下絵図と調査位置図

1 大館城跡

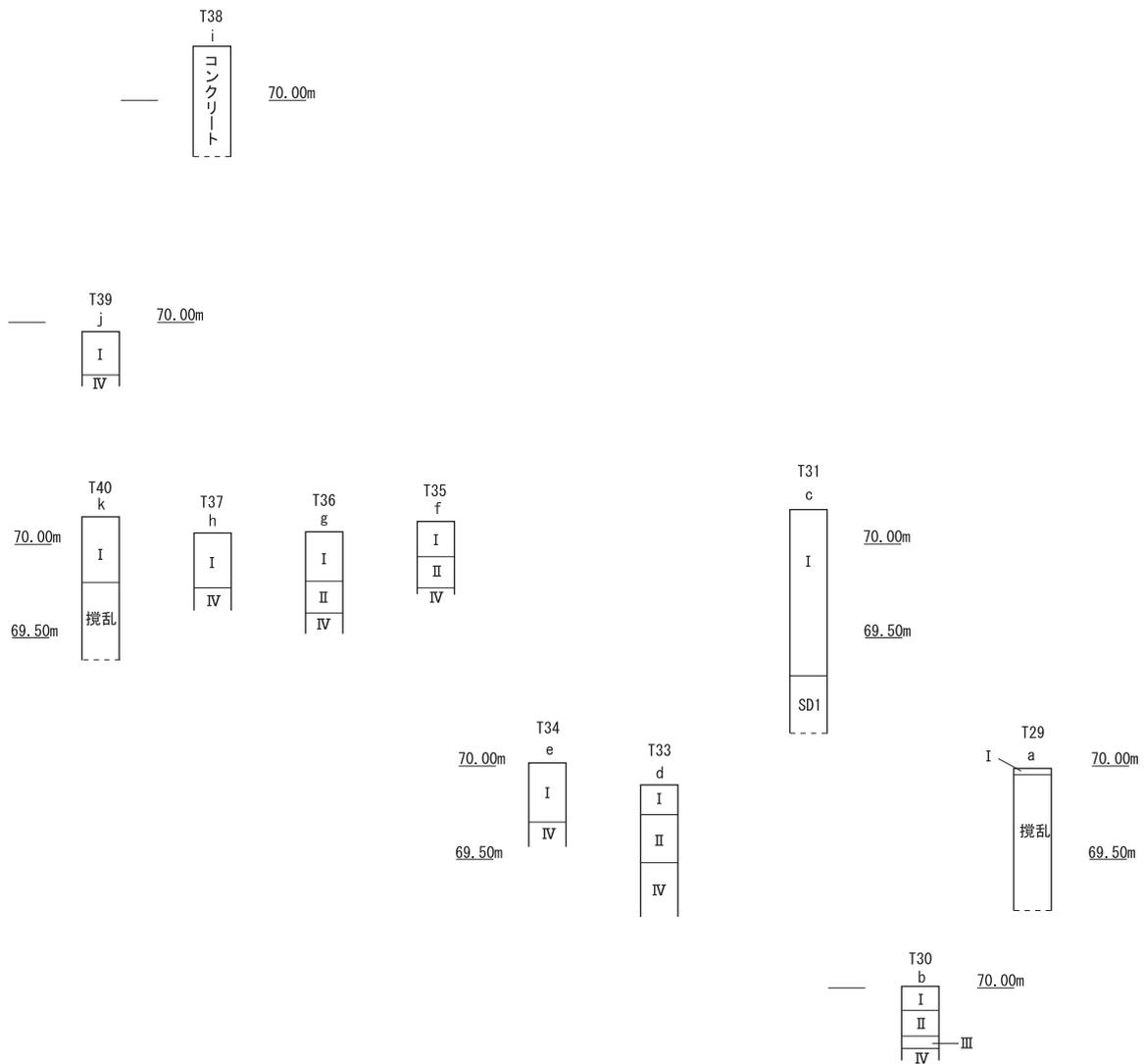


図 18 大館城跡土層柱状図 (1:40)

表18 種別遺構一覧

土坑	カマド状遺構	堀跡	柱穴・柱穴様 ピット	計
5	2	1	40	48

表19 出土遺物一覧

調査区遺構	P		計
	8		
	1	2	
SD1	7		7
TR31		1	1
TR37	2		2
TR39	2		2
計	11	1	12

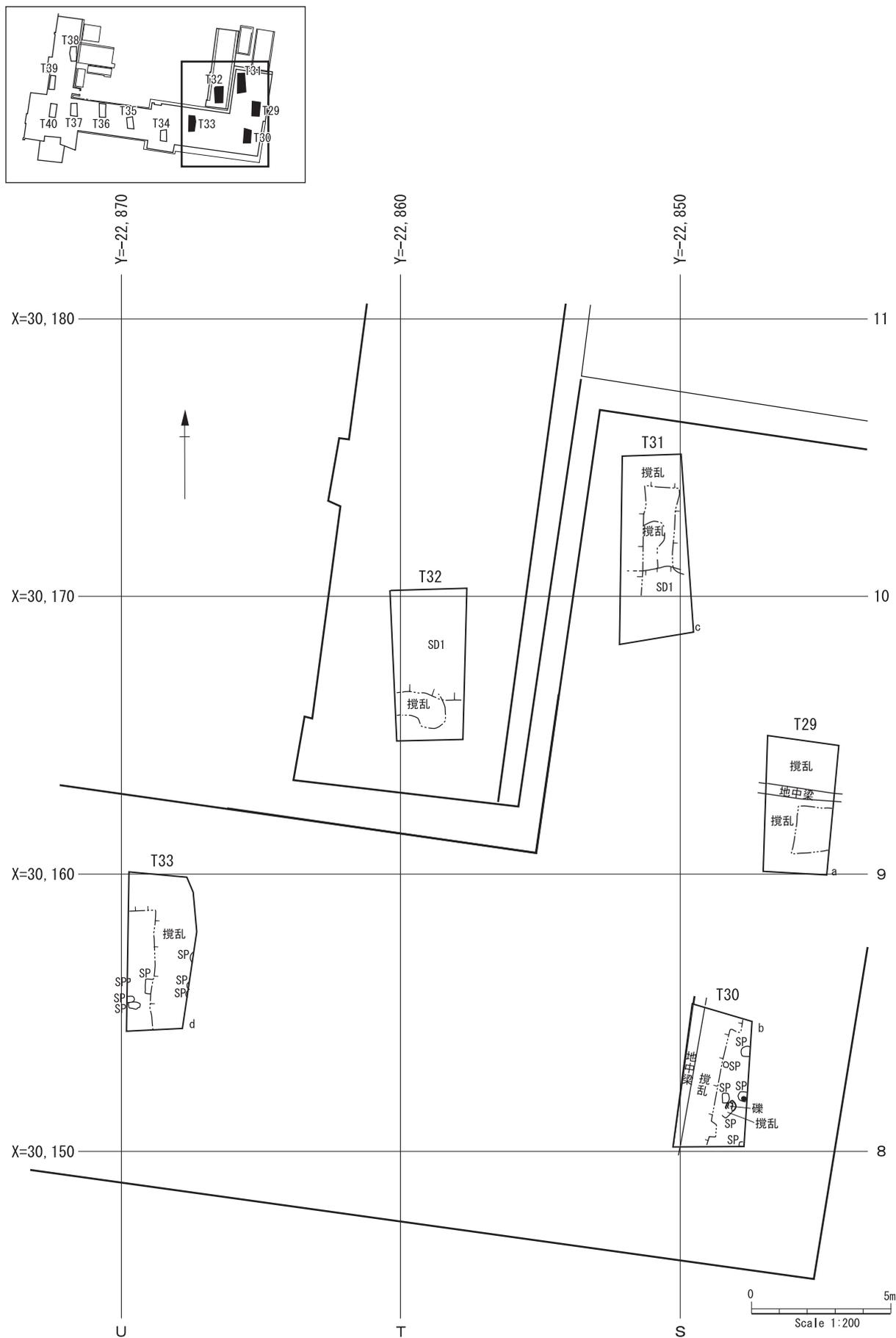


図 19 大館城跡確認調査平面図 (1) (1:200)

1 大館城跡

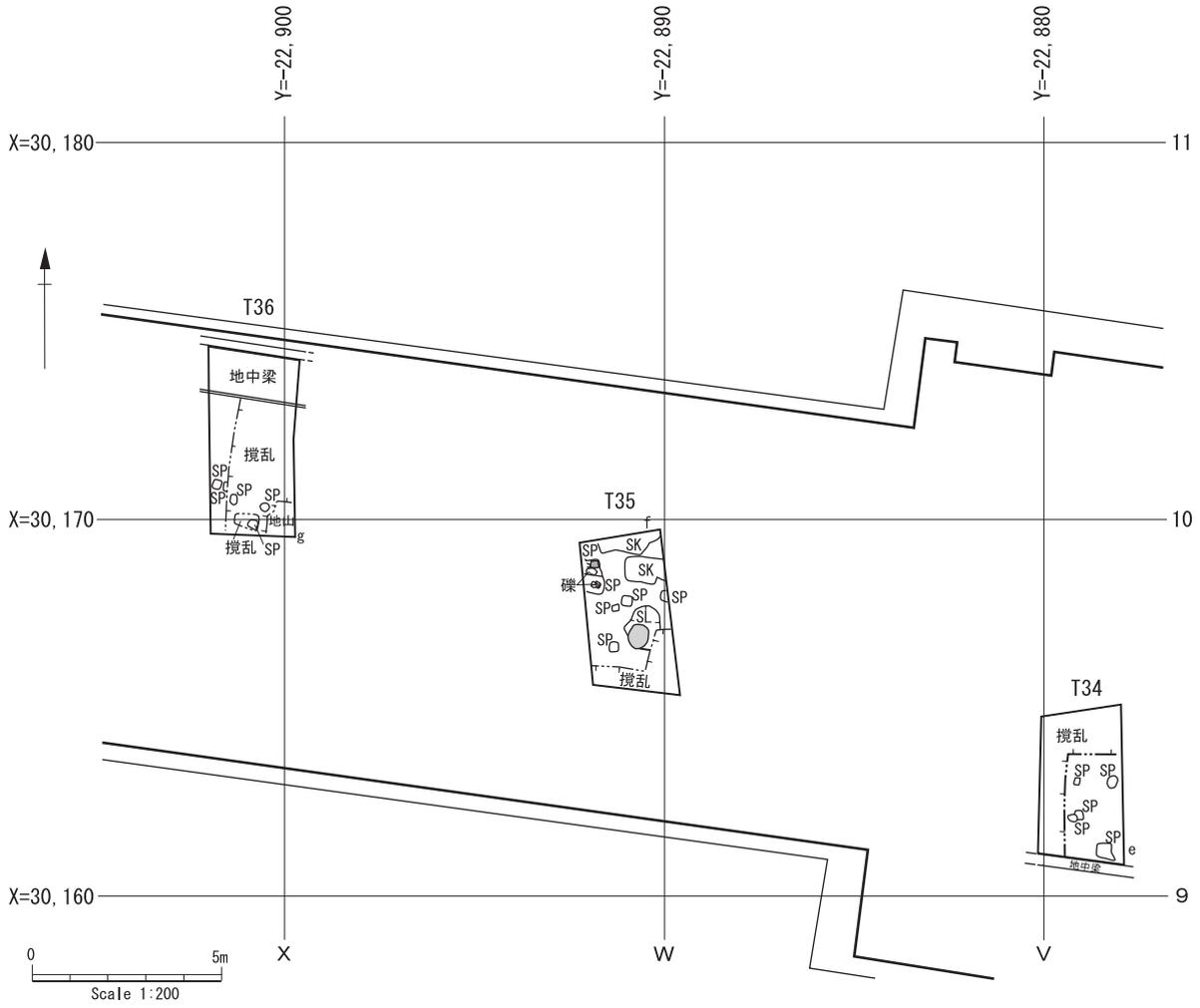
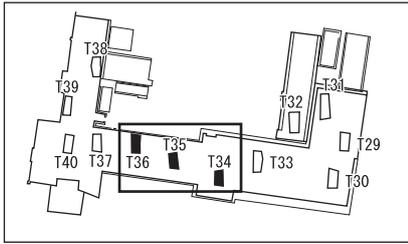


図 20 大館城跡確認調査平面図 (2) (1:200)

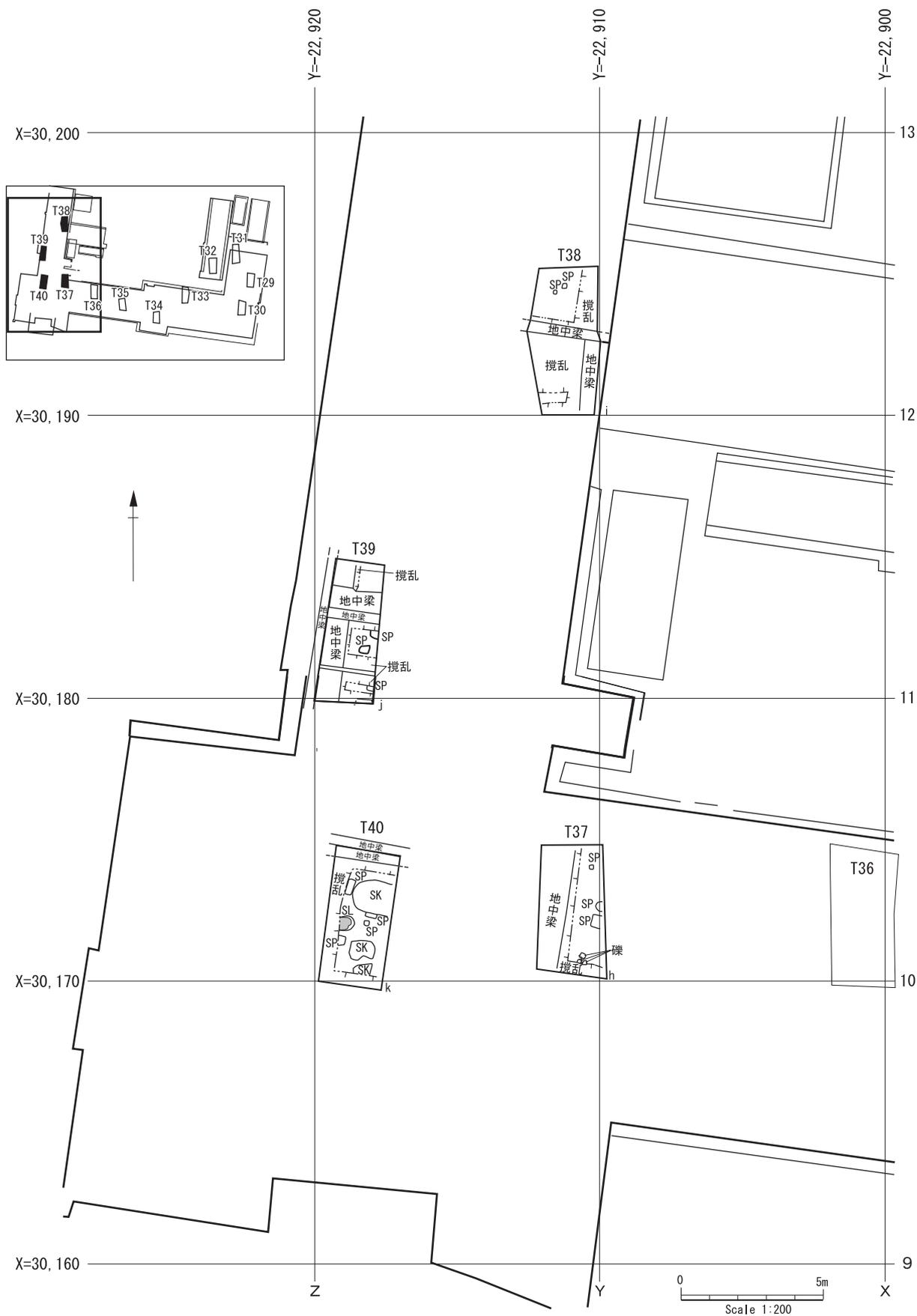


図 21 大館城跡確認調査平面図 (3) (1:200)

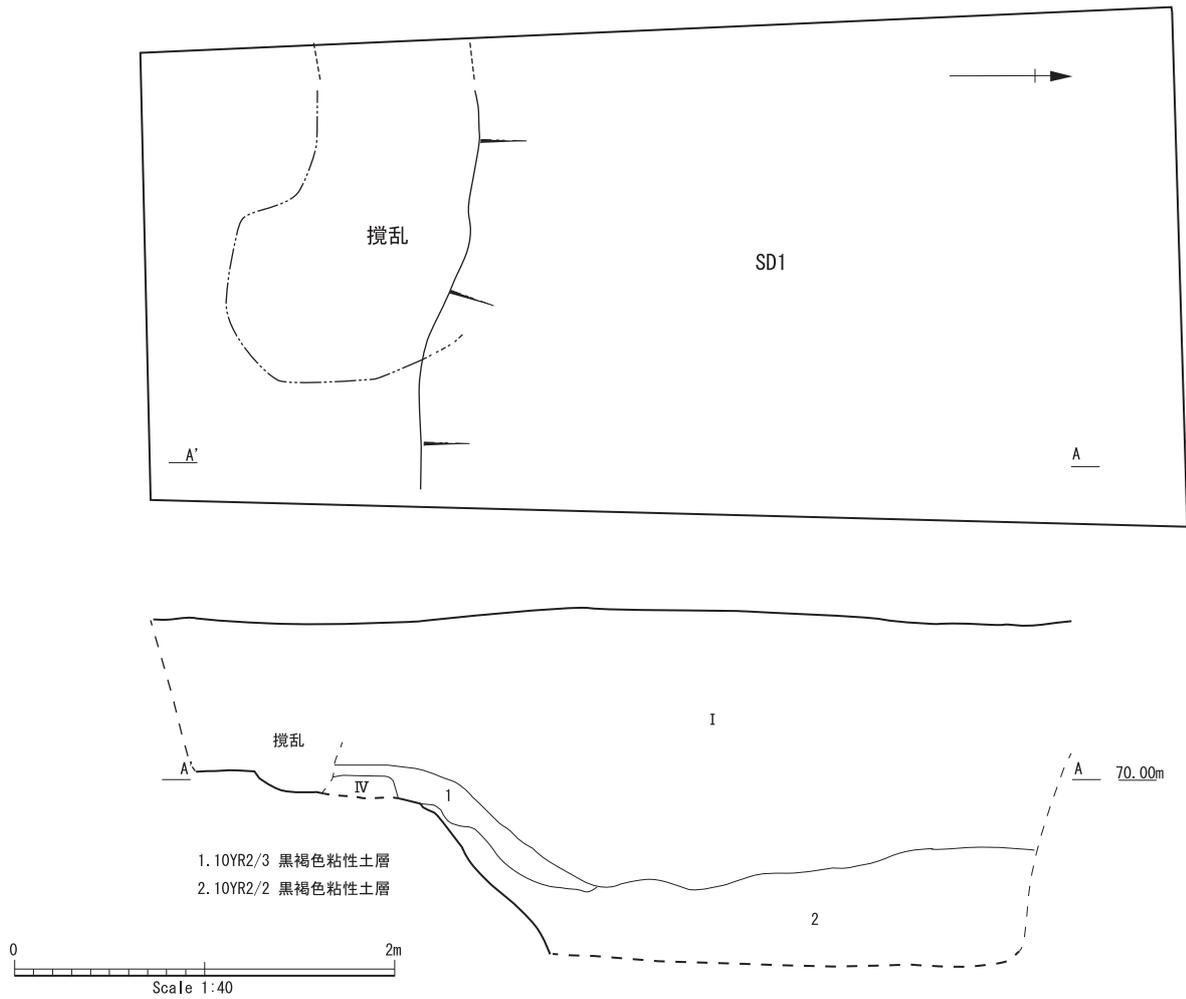
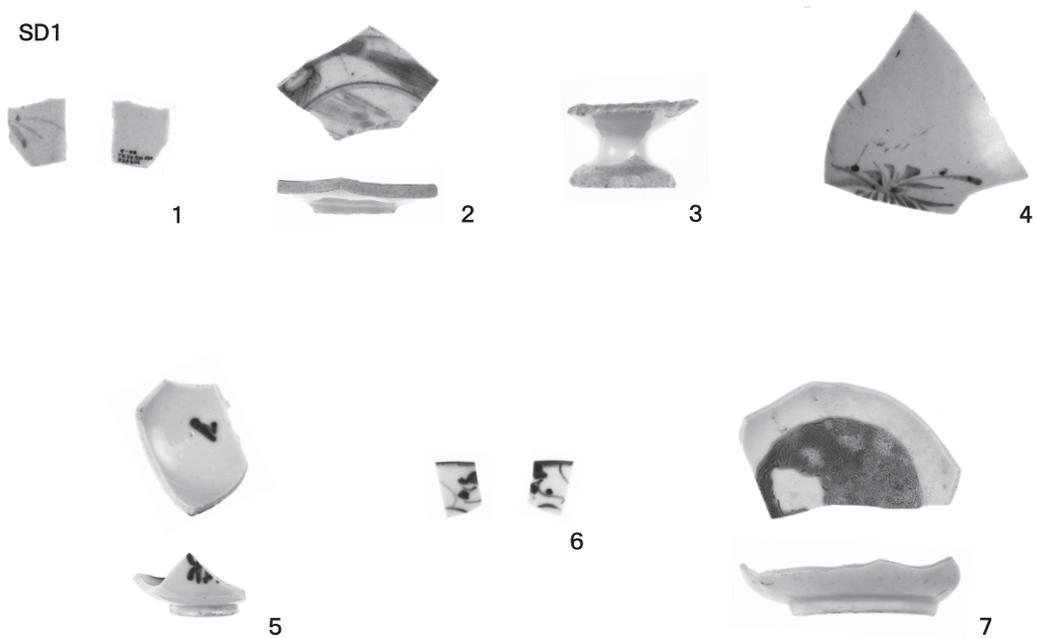


図 22 大館城跡確認調査 T32 平面図・SD1 断面図 (1:40)



図版 5 大館城跡出土遺物



作業状況（北西から）



調査地近景（北東から）



T29 検出状況（南から）



T30 検出状況（南から）



T31 検出状況（南から）



T31 SD1 検出状況（北西から）



T32 検出状況（南から）



T32 SD1 土層堆積状況（西から）

図版6 大館城跡調査状況(1)



T33 検出状況（南から）



T34 検出状況（南から）



T35 検出状況（南から）



T36 検出状況（南から）



T37 検出状況（南から）



T38 検出状況（南から）



T39 検出状況（南から）



T40 検出状況（南から）

図版7 大館城跡調査状況(2)

2 真館Ⅱ遺跡隣接地（個人住宅新築工事）

(1) 調査の経緯

比内町新館地区において個人による住宅新築が計画されたことから、建築主が依頼した建築設計事務所に、新築予定地が真館Ⅱ遺跡隣接地であること及び事業着手前の試掘調査の必要性について説明した。建築主の理解を得、令和4年4月に試掘調査を実施した。

(2) 遺跡の位置と周辺の環境

真館Ⅱ遺跡は、大館盆地を流下する犀川の右岸に位置する。平成24・28年度の調査により、縄文時代後期及び平安時代の遺構・遺物が発見されている。

周辺には、沢跡を挟んだ対岸に縄文時代の落とし穴が発見された真館Ⅲ遺跡が所在する。調査地は本遺跡の南側160mほどの隣接地である。

(3) 調査の方法

調査にあたり、平面直角座標系の交点に2m角のテストピットを1ヵ所設定した。テストピットの掘削はバックホーで行い、埋蔵文化財の有無等について調査した。

調査地の層序は、盛土、旧表土、黒褐色土層が堆積している。

I層 黒色土。旧表土。

II層 黒褐色を呈する土層。

(4) 調査の結果

調査範囲内に1ヵ所のテストピットを設定し調査したが、耕作等により削平されていた。今回の調査では遺構・遺物は検出されなかった。以上の結果から、今回調査を実施した地区については、遺跡のエリアに入らないと考えられる。

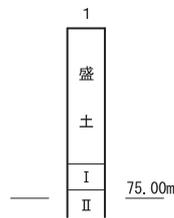
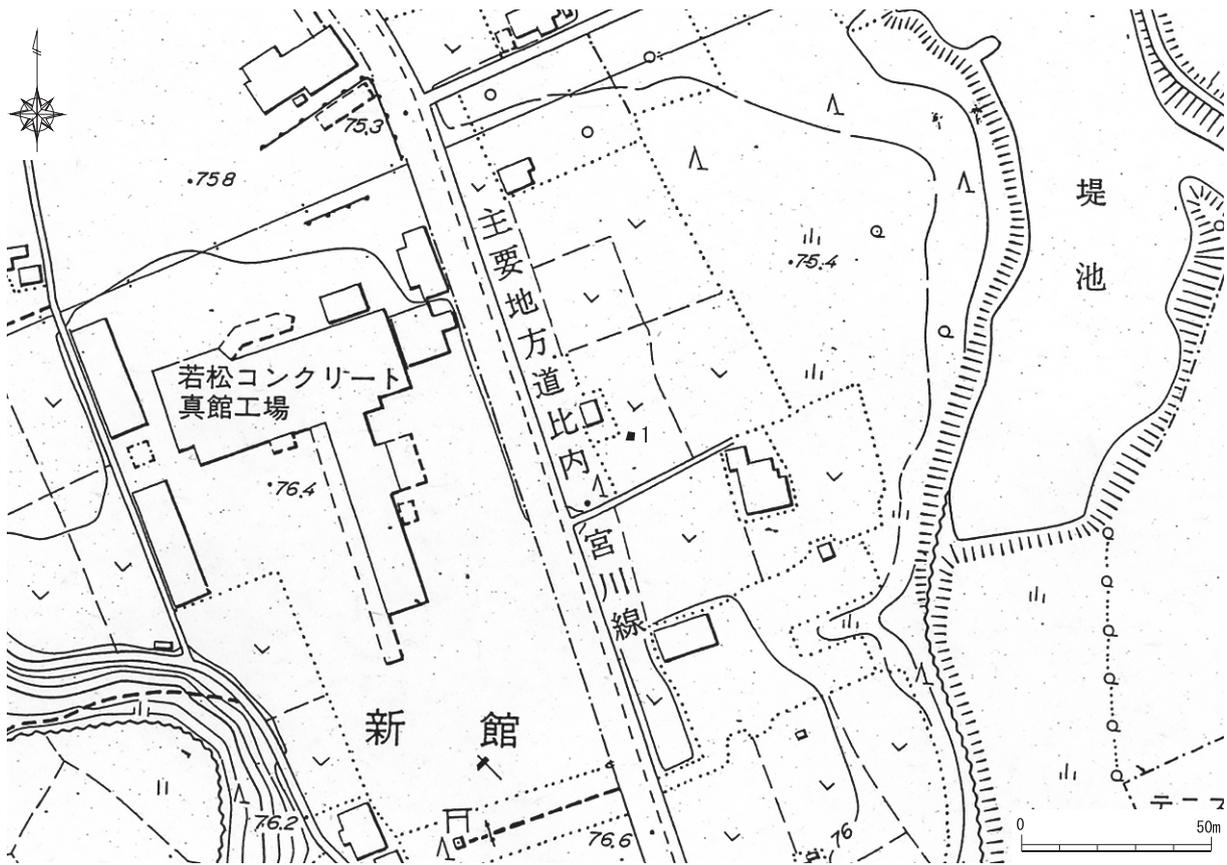


図 23 真館Ⅱ遺跡隣接地調査位置図 (1:2,000) と土層柱状図 (1:40)



調査地近景



1

図版 8 真館Ⅱ遺跡隣接地調査状況

3 本宮上ノ山遺跡隣接地（消防団車庫新築工事）

(1) 調査の経緯

本宮字寺ノ沢地内において公共事業による消防団車庫新築が計画されたことから、担当課に新築予定地が本宮上ノ山遺跡の隣接地であること、事業着手前に試掘調査を含めた事前協議が必要である旨説明した。担当課及び土地所有者の理解を得、令和4年9月に試掘調査を実施した。

(2) 遺跡の位置と周辺の環境

本宮上ノ山遺跡は、大館市域の南部、JR花輪線扇田駅から西に約4.5kmに位置し、大館市域を西流する米代川の支流である引欠川右岸の台地上に立地する。調査地は、本遺跡の東側30mほどの隣接地で位置は、北緯40度14分1秒、東経140度31分12秒（世界測地系）、標高は61mである。

調査地周辺には、南から南東側約80mに本宮館跡が、東側約120mには本宮寺ノ沢遺跡が隣接して分布する。



図 24 本宮上ノ山遺跡隣接地調査位置図 (1 : 2,500)

(3) 調査の方法

調査にあたり、開発予定地内に任意のトレンチ（2 m × 4 m）を1本設定した。トレンチの掘削は全て人力で行い、基盤層である黄褐色粘質土層（IV層）まで掘り下げ、遺構の有無の確認・遺物の収集等を行った。

調査地内の基本層序は、基盤をなすIV層に腐植土層が堆積する単純なものである。以下に基本層序を示す。

- I層 黒褐色土層。耕作土である。
- II層 黒色土層。耕作土である。
- III層 褐色～暗褐色を呈する土層。漸移層である。
- IV層 黄褐色を呈する粘質土層。

(4) 調査の結果

調査範囲内に1本のトレンチを設定し調査したが、調査区全域にわたり耕作により褐色～暗褐色土層（III層）まで削平されており、トレンチ西側の大半が消防用防火貯水槽により黄褐色粘質土（IV層）以下まで深く掘削されていた。今回の調査では、遺構は確認されず、遺物は土師器の小破片2点が攪乱坑より出土した。以上の結果から、今回の調査地内が遺跡のエリアに入るとは考えがたい。

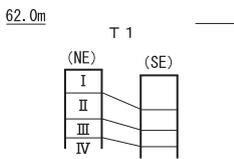


図 25 本宮上ノ山遺跡隣接地土層柱状図（1：40）

表20 出土遺物一覧

調査区	P	計
	7	
	2	
TR 1	2	2



調査区近景（南から）



T 1（北東から）



T 1（北東から）

図版 9 本宮上ノ山遺跡隣接地調査状況

4 芋ヶ岱遺跡及び芋ヶ岱Ⅱ遺跡（ほ場整備事業）

(1) 調査の経緯

雪沢地区において公共事業によるほ場整備が計画されたことから、令和3年11月から3ヵ年の予定で試掘調査を実施している。令和3年度実施の試掘調査については、『大館市内遺跡詳細分布調査報告書(6)』（大館市教育委員会編2022）に報告したとおりである。今回の調査は2年目にあたり令和4年10～11月に試掘調査を実施した。

(2) 遺跡の位置と周辺的环境

芋ヶ岱遺跡は、大館市域の東部、JR大館駅から東に約11kmの長木川南岸に位置し、長木川と黒沢川が形成した沖積台地上、旧大館市立雪沢小学校の南東側に立地する。かつて県道大館十和田湖線改修工事の際、水田下に縄文晩期の遺物が発見されたという。調査地の位置は、北緯40度16分53秒～17分7秒、東経140度40分43秒～57秒（世界測地系）、標高は144～153mである。

調査地周辺には、長木川対岸の北側約200mの台地上に大平下遺跡が、黒沢川を挟んだ東側約200mの台地上に水沢館跡が分布する。

(3) 調査の方法

調査にあたりテストピットを対象範囲内に任意に設定した。2m×2mの規模で22ヵ所を設定し、掘削は全て人力で行い、基盤層である褐色粘質土層（VI層）まで掘り下げ、遺構の有無の確認・遺物の収集等を行った。

遺跡内の基本層序は、基盤をなす褐色粘質土層に腐植土層が堆積する単純なものである。以下に基本層序を示す。

I層 表土・盛土層。

II層 黒色を呈する腐植土層である。（今回の調査では確認されていない）

III層 黄褐色～褐色を呈する砂質土層。十和田a降下火山灰層である。

IV層 黒褐色を呈する腐植土層。

V層 暗褐色を呈する腐植土層。IV層とVI層の漸移層である。

VI層 褐色を呈する粘質土層。

VII層 褐色を呈する砂礫層。

(4) 調査の結果

調査範囲内に22ヵ所のテストピット（以下TP）を設定して調査した。今回の調査では、一部で遺構・遺物が確認されたが、調査区全域にわたり過去の耕地整理により、黒褐色腐植土層（IV層）～暗褐色腐植土層（V層）まで削平されていた。そのうち10ヵ所のTPでは基盤層である褐色砂質土層（VI層）まで削平されていた。III層が確認されたのは、TP20のみで、II層は今回の調査では確認されなかった。

4 芋ヶ岱遺跡及び芋ヶ岱Ⅱ遺跡

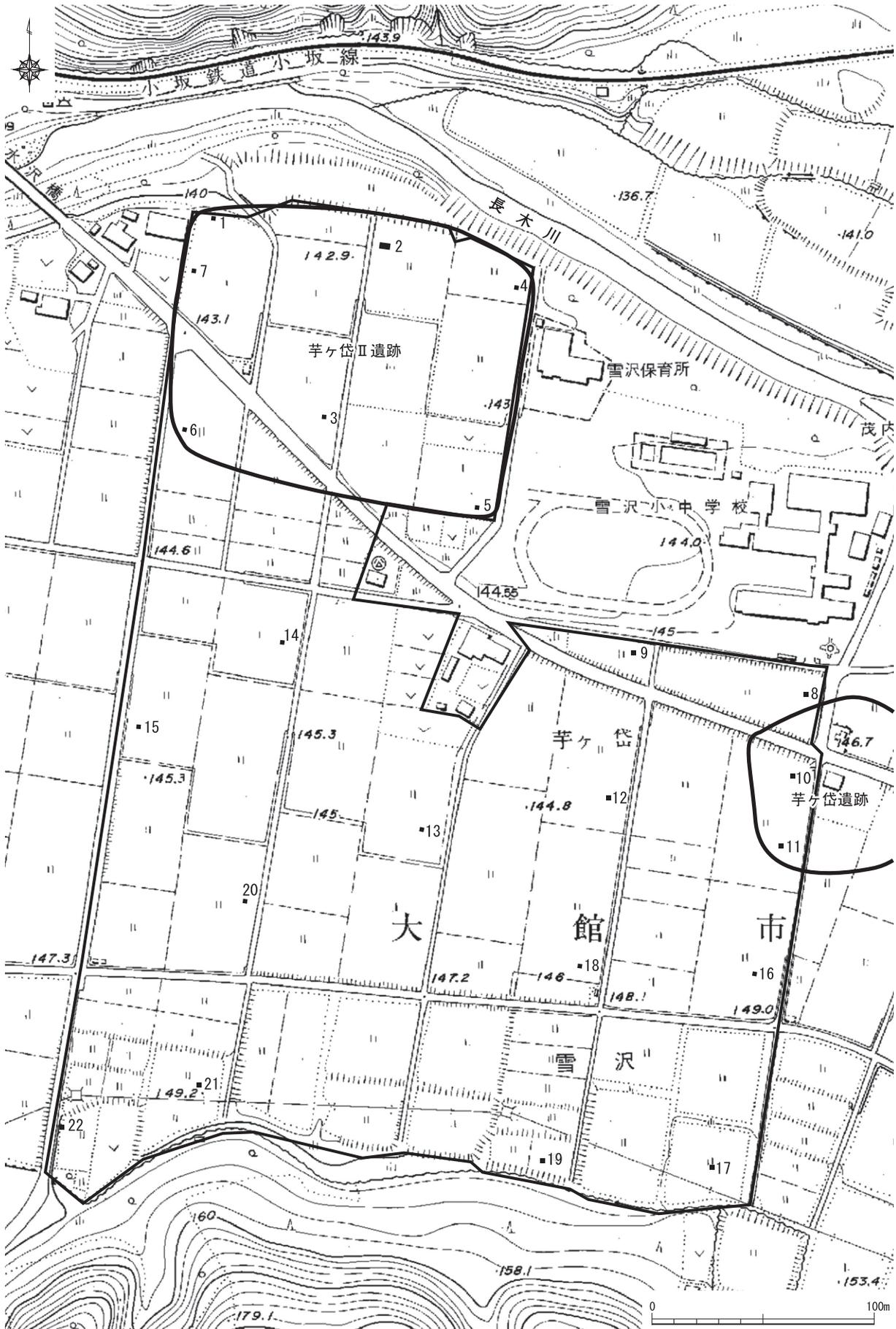
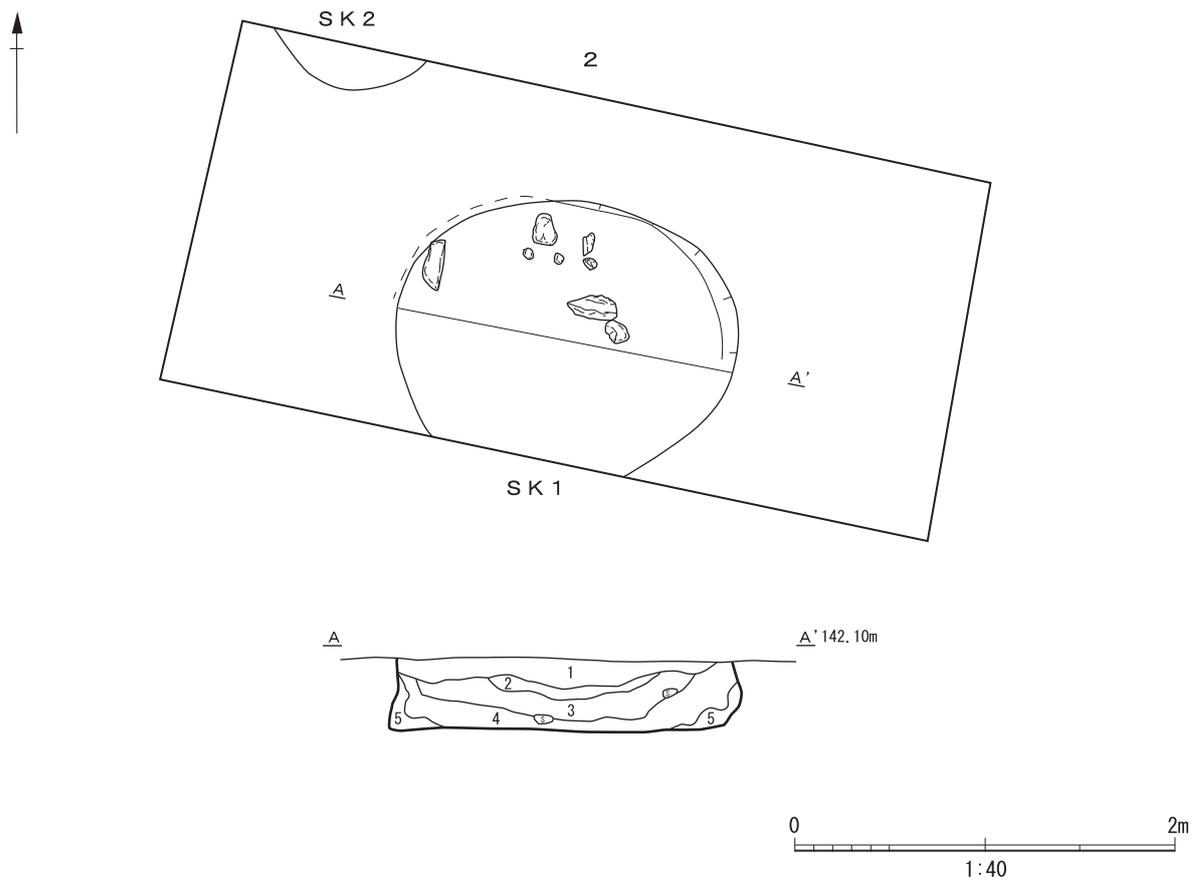


図 26 芋ヶ岱遺跡及び芋ヶ岱Ⅱ遺跡調査位置図 (1:2,500)



SK 1

- 1 10YR2/2 黒褐色 締まり有り。粘性有り。パミス (φ1~2mm) 微量、炭化粒少量混入。
- 2 10YR3/4 暗褐色 締まり有り。粘性有り。パミス (φ1~2mm) 微量混入。
- 3 10YR2/1 黒色 締まり有り。粘性強。ローム粒微量、炭化粒少量混入。
- 4 10YR3/3 暗褐色 締まり有り。粘性やや強。パミス (φ1~3mm) 少量、ローム粒少量混入。
- 5 10YR4/6 褐色 砂質。締まり有り。粘性有り。VIローム主体 (壁崩落土か)。

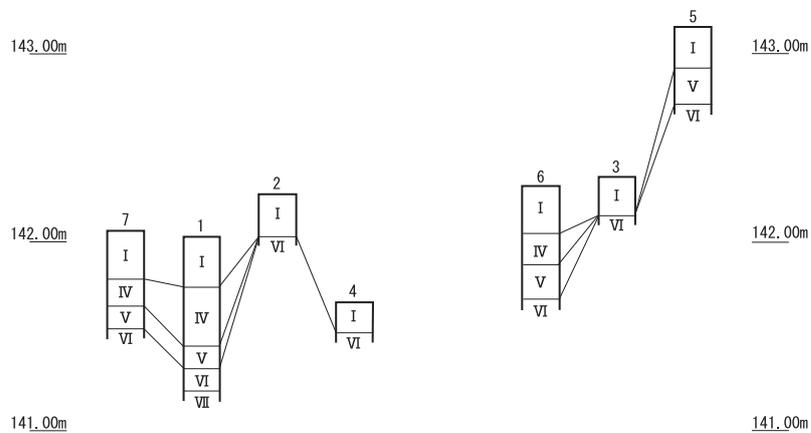


図 27 芋ヶ袋遺跡及び芋ヶ袋Ⅱ遺跡調査平面図・土坑 1 断面図と土層柱状図 (1) (1:40)

4 芋ヶ岱遺跡及び芋ヶ岱II遺跡

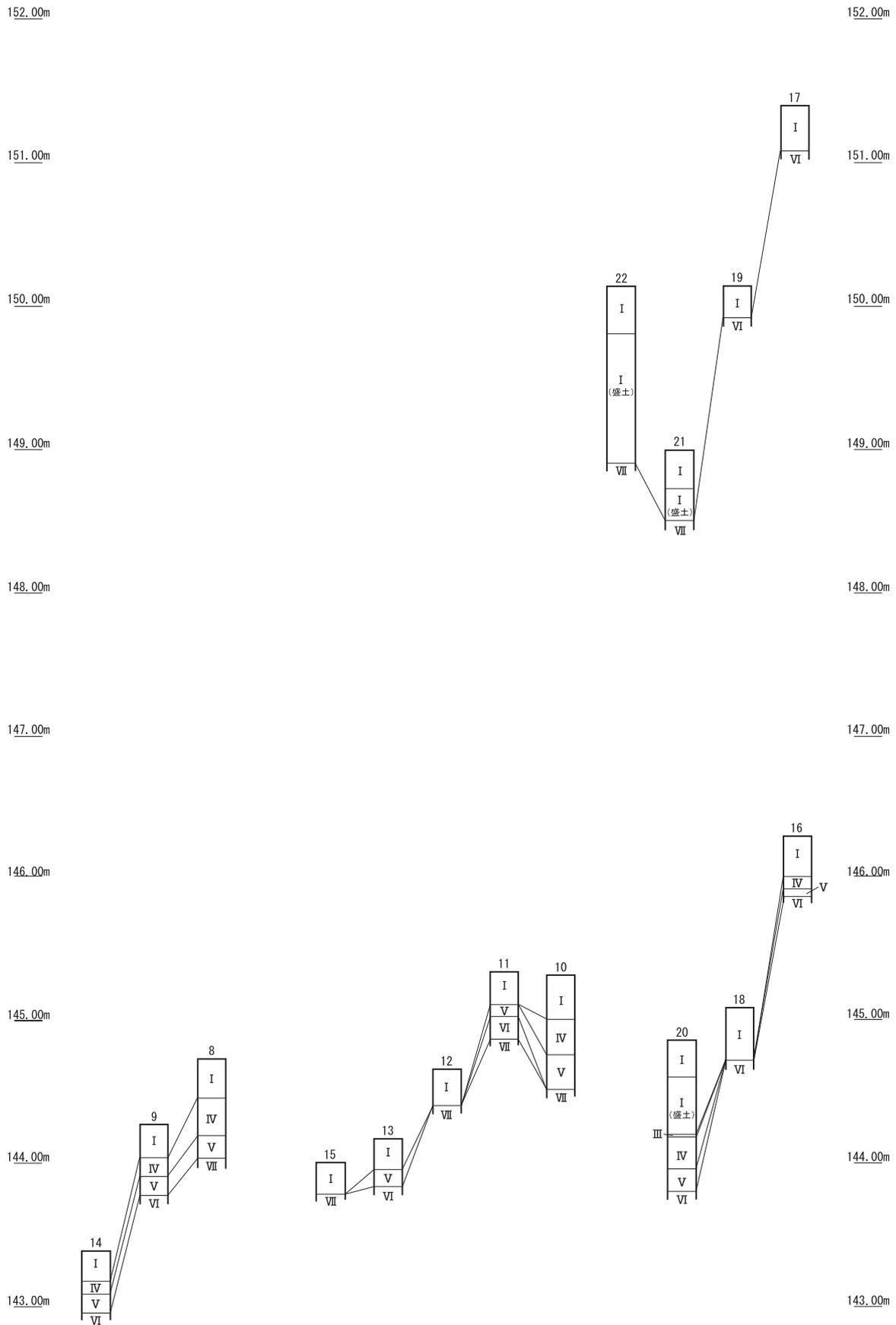


図 28 芋ヶ岱遺跡及び芋ヶ岱II遺跡土層柱状図(2) (1:40)

遺構は、T P 2で黒色土の落ち込みを2ヵ所確認し、うち1ヵ所を半截して調査した結果、袋状土坑(S K 1)と判断された。遺物は、周知の芋ヶ岱遺跡の範囲を含むT P 1・2・4～6・8・10・12から縄文土器片12点、石器・剥片類48点、礫4点が出土した。そのうち、T P 1・2・4～6を含む範囲で遺物が出土し、T P 2では遺構も検出されたことから新たな遺跡が確認された。

1) 遺構

土坑1

遺構 T P 2を調査中に円形の黒色土の落ち込みがあったことから発見した。土坑の南側は調査区外に拡がり、平面形はやや歪んだ円を呈する。規模は確認面で径1 m70cmほどである。確認面からの深さは40cmほどである。底面はほぼ平坦で、壁は急角度で立ち上がり、一部ではオーバーハングする。

埋土 埋土は黒～黒褐色土を主体とする土層からなり、5層に区分される。このうち、1・3層中には炭化物が混入している。堆積状態は、自然堆積とみなされる様相を示している。

遺物 土坑1から出土した遺物は、縄文土器片7点、剥片類17点、礫1点である。このうち出土した剥片類はいずれも珪質頁岩で、中には同一母岩と思われるものも数点あり、2点が接合した。図版12の1～7が土坑1出土である。1・2は縄文土器で1は体部、2は台付鉢形土器の台部分である。5群に分類されるとみられるが、1は風化により外面に縄文が僅かに確認できる程度である。3～7は剥片類で、このうち3～5は接合した2点の剥片と同一母岩と思われ、一括で埋納された可能性も考えられる。

2) 遺物

今回の調査で土坑1以外からは、縄文土器片5点、石器・剥片類31点、礫3点が出土している。図版12の8～11、13～16は、いずれも珪質頁岩のU. フレイクである。8はT P 1 IV層からの出土。9・10はT P 4で、11はT P 5のいずれもI層出土である。12・13はT P 6のI層出土で、12は5群土器の鉢または壺形土器の口縁部破片である。口縁部が外反し、外面は横位のナデである。14～16はいずれもI層出土で、14はT P 8で、15はT P 10で、16はT P 12の出土である。

3) 取り扱い

以上の結果から、周知の遺跡「芋ヶ岱遺跡」範囲内については、数点の遺物が得られたのみで遺構は確認されなかったため、工事立会等の軽微な保護措置が妥当と判断される。

また、新発見の遺跡については、小字名から「芋ヶ岱Ⅱ遺跡」とし、周知資料に登載することとする。遺跡範囲は、前述のとおり過去の削平によって遺物包含層は失われている可能性はあるが、遺物が出土しているT P 1からT P 6を含み、剥片類数点を表採したT P 3東側を含む図29に示した範囲と推測される。なお、本遺跡は未調査である東西側に範囲が拡がる可能性が考えられる。新規に登載した遺跡の概要は、次頁に示すとおりである。

「芋ヶ岱Ⅱ遺跡」が確認された範囲における取り扱いは、遺跡内にて開発事業等を行う場合には、事前の発掘調査が必要と考えられるが、事業者との協議により令和5年度に遺跡の詳細な内容及び範囲を確認する確認調査を実施した上で判断することとした。

なお、今回の調査は、当該事業の令和5年度施工範囲を対象としており、令和6年度施工範囲については、来年度以降に試掘調査を実施する予定である。

新発見遺跡の概要

遺跡の名称 芋ヶ岱Ⅱ遺跡
 登載番号 204-4-173
 種別 集落跡
 時代 縄文時代
 所在地 大館市雪沢字預ヶ岱319ほか
 推定面積 約19,000m²
 標高 142~144m
 遺跡の現状 水田・畑・道路

表21 遺構一覧

土坑	計
2	2

表22 出土遺物一覧

調査区遺構	P		S			合計	
	5	計	1 4	2	4		
SK1	7	7		17	1	18	25
TP1			2	3		5	5
TP2	1	1	2	7		9	10
TP4			3		2	5	5
TP5			1	1		2	2
TP6	4	4	1	3	1	5	9
TP8			1	1		2	2
TP10			1			1	1
TP12			1			1	1
表採				4		4	4
計	12	12	12	36	4	52	64



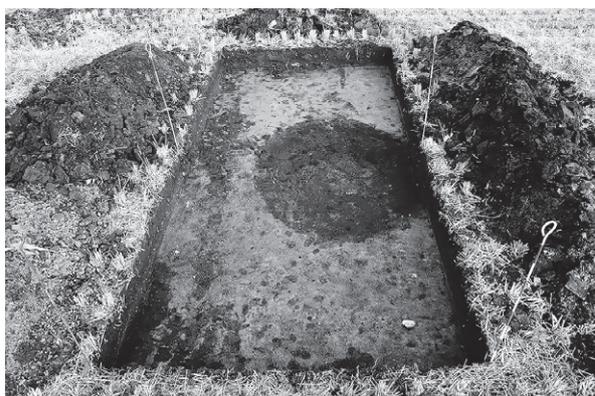
図29 芋ヶ岱Ⅱ遺跡と周辺の地形 (1 : 5,000)



調査区北部近景（南東から）



調査状況



2（西から）



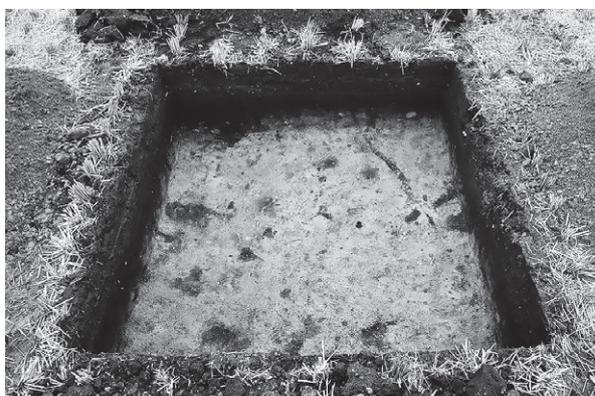
2 SK1 調査状況（東から）



2 SK1 調査状況（北から）



5（南から）



6（北から）



7（南から）

図版 10 芋ヶ袋遺跡及び芋ヶ袋Ⅱ遺跡調査状況（1）

4 芋ヶ岱遺跡及び芋ヶ岱II遺跡



調査区東～南東部近景（北東から）



調査区西～南西部近景（北西から）



8（東から）



11（南から）



14（南から）



16（南から）

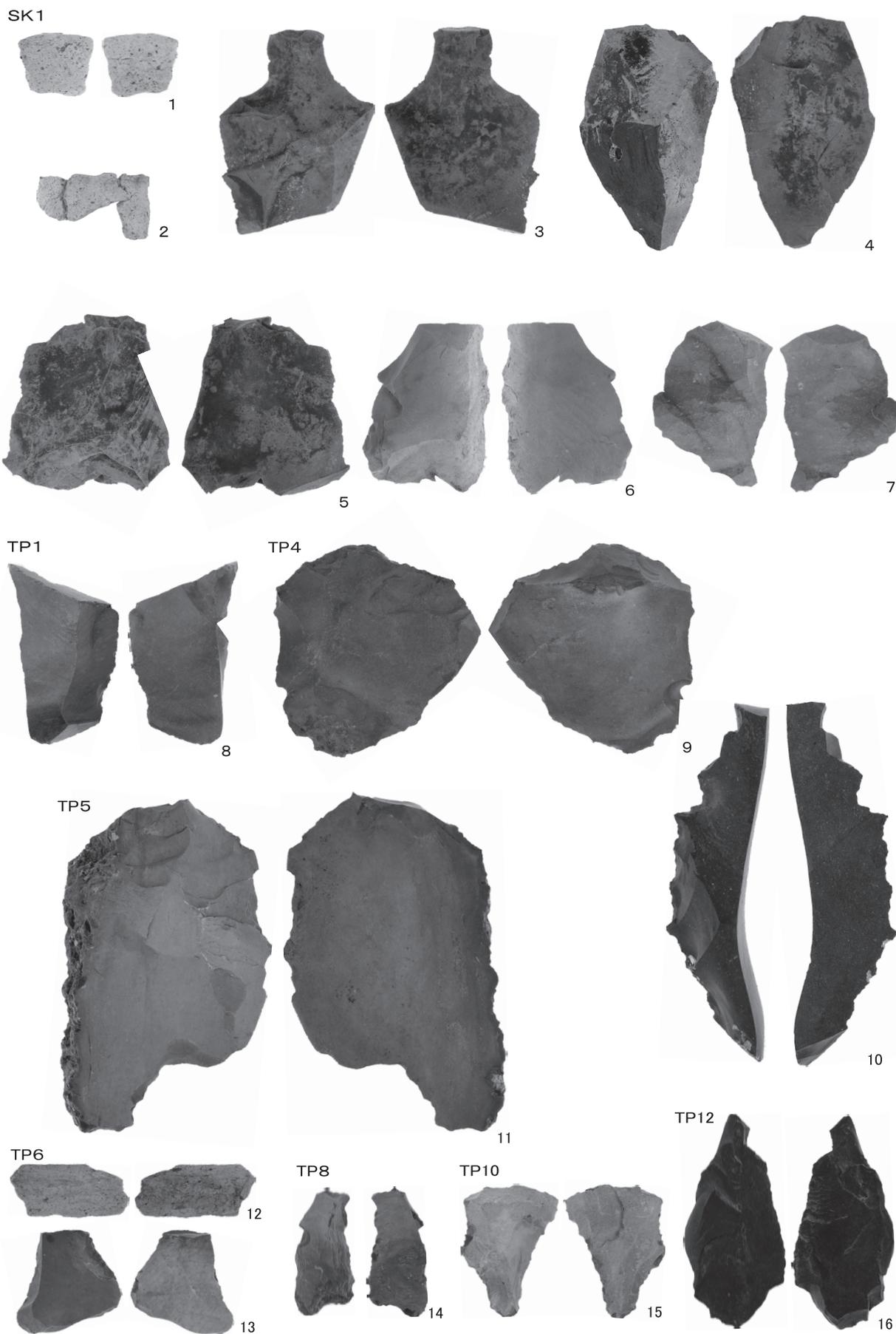


20（南から）



22（南から）

図版 11 芋ヶ岱遺跡及び芋ヶ岱II遺跡調査状況（2）



図版12 芋ヶ岱遺跡及び芋ヶ岱Ⅱ遺跡出土遺物

5 萩峠遺跡隣接地（ほ場整備事業）

(1) 調査の経緯

軽井沢地区において公共事業によるほ場整備が計画されたことから、令和2年10月から3ヵ年にわたり試掘調査を実施している。令和2・3年度実施の試掘調査については、『大館市内遺跡詳細分布調査報告書(6)』（大館市教育委員会編2022）に報告したとおりである。今回の調査は3年目にあたり令和4年11～12月に試掘調査を実施した。

(2) 遺跡の位置と周辺環境

萩峠遺跡は、大館市域の南東部、JR花輪線大滝温泉駅から北東に約2.5kmに位置し、西流する米代川右岸の段丘上に立地する。調査地は遺跡の北～西側に隣接し、位置は北緯40度13分19～38秒、東経140度39分24～54秒（世界測地系）、標高は73～86mである。

(3) 調査の方法

調査にあたりテストピットは、対象範囲内に任意に設定した。2m×2mの規模で35ヵ所を設定し、掘削は全て人力で行い、基盤層である褐色砂質土層（IV層）まで掘り下げ、遺構の有無の確認・遺物の収集等を行った。

調査地内の基本層序は、基盤をなす褐色砂質土層に腐植土層が堆積する単純なものである。以下に基本層序を示す。

- I層 黒褐色土層。耕作土及び盛土である。
- II層 黒色を呈する腐植土層である。
- III層 黒褐色を呈する砂質土層。II層とIV層の漸移層である。
- IV層 褐色を呈する砂質土層。

(4) 調査の結果

調査範囲内に35ヵ所のテストピットを設定して調査した。今回の調査では、遺構・遺物は確認されず、調査区全域にわたり過去の耕地整理により、IV層まで削平されており、ほとんどのテストピットで、基盤層のIV層上にI層が堆積するだけであった。

II～III層が確認されたのは、TP22、25、34のみである。

以上の結果から、今回の調査対象地には埋蔵文化財包蔵地は所在していないものと考えられる。

なお、3ヵ年にわたって実施してきた当該事業における試掘調査は、今回が最終年であり事業範囲内では埋蔵文化財包蔵地は所在していないことが確認された。



图 30 萩峠遺跡隣接地南調査区調査位置図 (1:2,500)

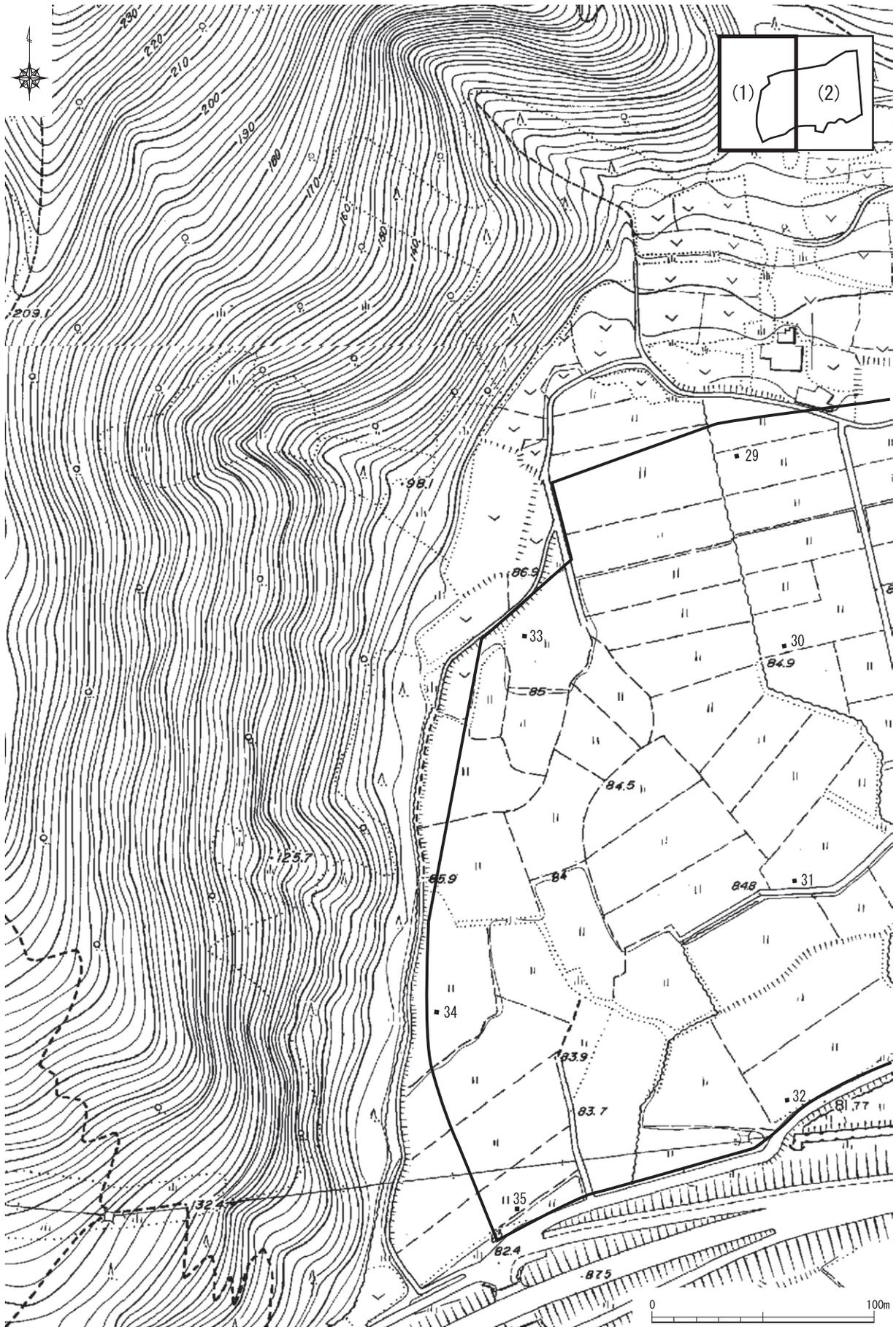


图 31 萩峠遺跡隣接地北調査区調査位置図(1) (1:2,500)

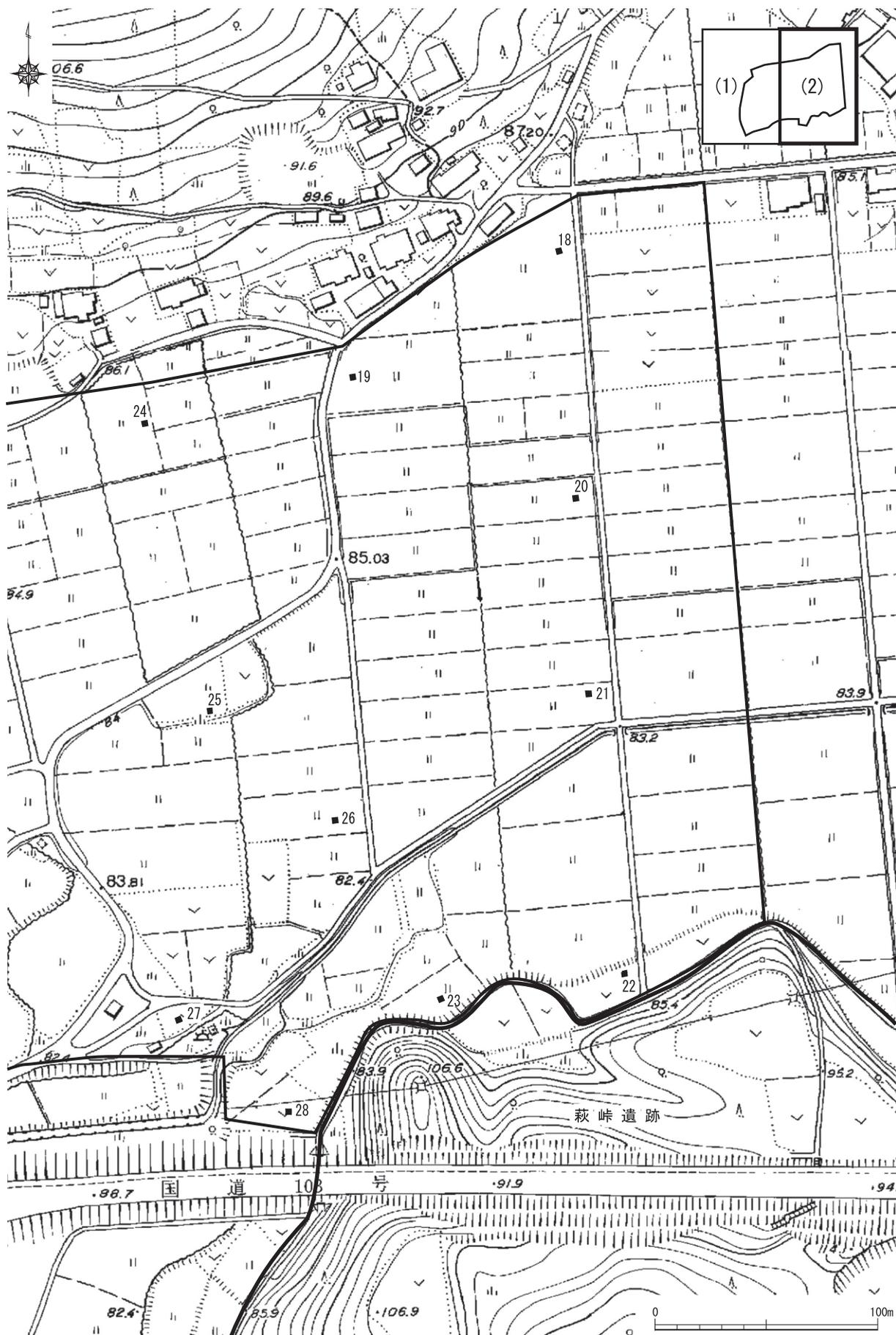


图 32 萩峠遺跡隣接地北調査区調査位置图 (2) (1:2,500)

5 萩峠遺跡隣接地

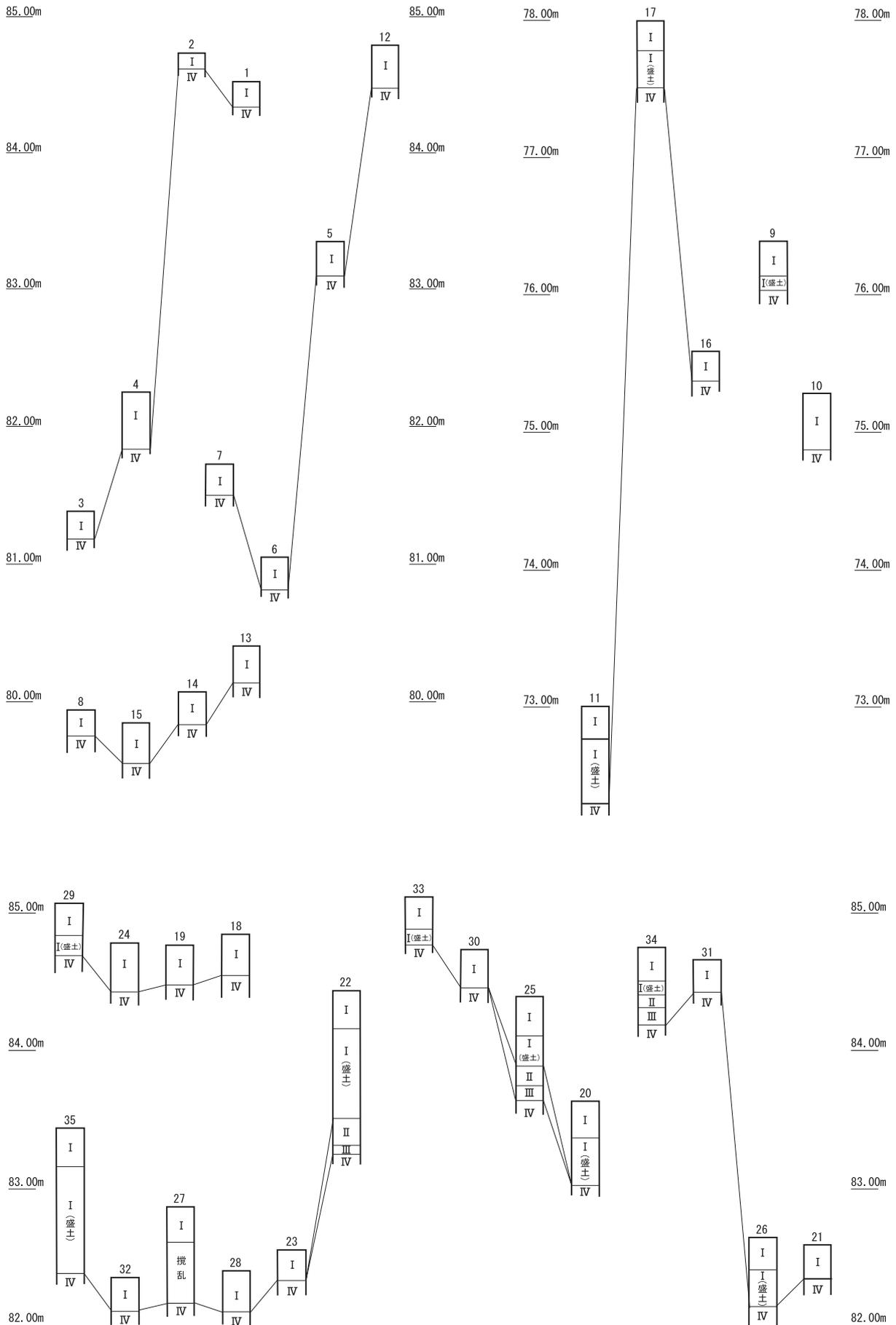


图33 萩峠遺跡隣接地土層柱状图 (1:40)



南調査区近景（北から）



1（北西から）



14（西から）



南調査区西部（北から）



11（西から）



北調査区近景（北東から）



25（西から）



31（西から）

図版 13 萩峠遺跡隣接地調査状況

6 中仕田Ⅱ遺跡（個人住宅新築工事）

(1) 調査の経緯

早口地区において個人による住宅新築が計画されたことから、建築主が依頼した建築設計事務所に新築予定地が中仕田Ⅱ遺跡であること、事業着手前に試掘調査が必要である旨説明した。建築主の理解を得、令和4年12月に試掘調査を実施した。

(2) 遺跡の位置と周辺的环境

中仕田Ⅱ遺跡は、田代岳から南に広がる丘陵を開析する早口川の左岸に位置する。本遺跡は、平成9年度に田代町史編集委員が実施した分布調査により発見された縄文時代中期及び平安時代の遺物包含地（秋田県教育委員会登録番号204-15-38）である。本遺跡における本発掘調査の履歴はない。

周辺には、東約0.1kmに縄文時代前期の土器が発見された中仕田Ⅲ遺跡、北東約0.4kmに縄文時代前期の土器が発見された中仕田遺跡、北東約0.6kmに縄文土器や須恵器、土師器が発見された金堀沢遺跡、北約0.3kmに土師器が発見された中仕田Ⅰ遺跡、早口川を挟んだ対岸に縄文時代晩期の墓である矢石館遺跡が所在する。

(3) 調査の方法

調査にあたり、既存の住宅に平行して長さ6m、幅1mのトレンチを設定した。調査では、工事で掘削される表土以下約60cmまで人力で掘り下げ、遺構の記録・遺物の収集等を行った。

調査地の層序は、表土、黒色土層が堆積している。トレンチの南端付近では腐植土上に十和田a降下軽石（T o - a）とみられる灰白色火山灰が部分的に認められた。

I層 表土。

II層 黒色を呈する腐植土層で、遺物包含層。

(4) 調査の結果

調査範囲内に1本のトレンチを設定し調査したところ、良好な遺物包含層が残存していた。今回の調査では現地表下約60cmまで掘り下げたが、遺構は確認されなかった。トレンチの北部についてはローム粒混入黒色土が堆積しており、遺構が存在している可能性がある。遺物は、土器333点、石器2点、剥片8点、礫45点、種子1点、合計389点を得た。

図版15-1は3群土器の口縁部の小破片で、表面に羽状縄文がわずかに確認できる程度である。2~16は4群土器のうち、大木10式並行に相当すると思われるが、後期初頭まで下る可能性もある。図版15-17は珪質頁岩のU. フレイクである。図版15-18はたたき石・擦石類。

以上の結果から、今回調査を実施した地区については、縄文時代の遺物包含層が存在しており、既存住宅部分についても埋蔵文化財包蔵地が残存している可能性が高い。工事予定面積の71.29㎡に対して本発掘調査が必要と判断した。



図 34 中仕田Ⅱ遺跡調査位置図 (1:2,000)と土層柱状図 (1:40)



調査地近景



作業状況



トレンチ1



遺物出土状況

図版 14 中仕田Ⅱ遺跡調査状況

表23 出土遺物一覧

調査区	P			S						N	合計
	3	4	計	1			2	4	計		
				4	6	小計					
TR 1	4	329	333	1	1	2	8	45	55	1	389



図版 15 中仕田Ⅱ遺跡出土遺物

報 告 書 抄 録

ふりがな	かねさかいせき・おおだてしないいせきしょうさいおんぷちようさほうこくしょ(7)							
書名	金坂遺跡・大館市内遺跡詳細分布調査報告書(7)							
副書名								
巻次								
シリーズ名	大館市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第20集							
編著者名	嶋影壮憲・滝内 亨・馬庭和也							
編集機関	秋田県大館市教育委員会歴史文化課							
所在地	〒017-0012 秋田県大館市釈迦内字獅子ヶ森1番地 TEL 0186-43-7133 FAX 0186-48-2512							
発行機関	秋田県大館市教育委員会							
所在地	〒018-3595 秋田県大館市早口字上野43番地1 TEL 0186-43-7111 FAX 0186-54-6100							
発行年月日	2023年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 ㎡	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
かねさかいせき 金坂遺跡	あきたけんおおだてしあざはちまん 秋田県大館市宇八幡	05204	4-47	40°16'25"	140°34'11"	20220818 ～ 20220910	62	記録 保存 調査
おおだてしょうあと 大館城跡	あきたけんおおだてしあざなかじょう 秋田県大館市宇中城	05204	4-46	40°16'17"	140°33'51"	20220224 ～ 20220311	120	試掘・ 確認 調査
しんだてにいせきりんせつち 真館II遺跡隣接地	あきたけんおおだてしひないまちにいでて 秋田県大館市比内町新館	05204	12-52	40°12'49"	140°35'12"	20220419 ～ 20220420	5.5	
もみやかみやまいせきりんせつち 本宮上ノ山遺跡隣接地	あきたけんおおだてしもとみや 秋田県大館市本宮	05204	4-99	40°14'1"	140°31'12"	20220914 ～ 20220916	8	
いもがたいいせき・いもがたいにいせき 芋ヶ岱遺跡・芋ヶ岱II遺跡	あきたけんおおだてしゆきさわ 秋田県大館市雪沢	05204	4-58 4-173	40°17'3"	140°40'47"	20221020 ～ 20221112	88	
はぎとうげいせきりんせつち 萩峠遺跡隣接地	あきたけんおおだてしかりいざわ 秋田県大館市軽井沢	05204	4-81	40°13'21"	140°39'15"	20221115 ～ 20221206	140	
なかしだにいせき 中仕田II遺跡	あきたけんおおだてしはやぐち 秋田県大館市早口	05204	15-38	40°17'56"	140°24'56"	20221220 ～ 20221221	6	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構			主な遺物	特記事項	
金坂遺跡	狩猟場 屋敷	縄文 江戸	落し穴、柱列、溝、池跡、 柱穴・柱穴様ピット			陶磁器、金属製品、 石製品	落し穴検出 池跡検出	
大館城跡	城館	江戸	土坑、堀跡、カマド状遺構、 柱穴・柱穴様ピット			陶磁器	馬出に伴う堀 跡の発見	
芋ヶ岱遺跡	散布地	縄文				石器		
芋ヶ岱II遺跡	集落	縄文	土坑			縄文土器、石器	新発見	
中仕田II遺跡	散布地	縄文				縄文土器、石器		
要約	<p>金坂遺跡は秋田県の北部、大館市の中心部に所在する。遺跡は長木川左岸の河岸段丘上、標高74～75mに立地する。調査は個人住宅建築工事に伴って実施した。範囲は住宅用道路部分の長さ約6m、幅約6mである。八幡町の近藤氏屋敷1軒部分を調査。調査の結果、縄文時代及び江戸時代の遺構・遺物が検出された。縄文時代の遺構は落し穴2基のみで遺物はない。江戸時代の遺構には柱列1条、区割溝、池跡1基、柱穴、柱穴様ピットがある。江戸時代の出土遺物には陶磁器のほか、金属製品・石製品がある。石製品はおもに硯と砥石である。</p> <p>令和4年度の市内遺跡詳細分布調査は、5の開発事業予定地内の試掘・確認調査を実施した。その結果、新発見の遺跡「芋ヶ岱II遺跡」を確認し、芋ヶ岱II遺跡、中仕田II遺跡については本調査が必要、芋ヶ岱遺跡については工事立会が必要と判断し、開発事業との調整を図った。</p>							

金坂遺跡・大館市内遺跡詳細分布調査報告書（7）

発行日 令和5年3月31日 発行
編集 大館市教育委員会歴史文化課
大館市釈迦内字獅子ヶ森1番地
発行 大館市教育委員会
大館市早口字上野43番地1
印刷 有限会社さとう印刷工業
大館市字馬喰町37番地
